三つの夜想曲

それは　誰もが通り抜ける道

何も知らないままに　何かを選びとること

瞳を精一杯にこらして

一番大切な『何か』を　見つけ出すこと

懐かしくも暖かい　古き静謐を切り裂き捨てても

一

「今年も、盛況ですね」

ミーノスは、白いレースのカーテンで縁どられた二階の窓から下を眺めてそう呟いた。紺のブレザーに混じって、様々な制服が見える。少し幼げな姿。まだアルテンベルクの制服を支給されていない、新入生たちの晴れ姿だった。

「この時期はどこでもそうであろう……お前もジュネーヴに帰れば、党員の勧誘で忙しい筈。こんなところで油を売っていてよいのか？」

「私は今年は貴女を手伝うよう申し渡されておりますから。『パンドラ』様。」

ぬばたまの黒髪をもつ女性を振り返って、唇の端に笑みを浮かべる。アルテンベルク一の美女と謳われる彼女の、本当の姿を知るものは少ない。

『パンドラ』はゆっくりと頷いた。そしてつとミーノスの隣へよると、彼と共に窓の下を眺め降ろし、眼下に深紅の色彩を捜し求めた。

遺伝学的にあり得る筈のない、血のような赤い髪を。

「……ミーノス。ではお前に命じる」

「何なりと。」

「今日、このアルテンベルクに予言の少年が入学して来る。彼に近づき、その少年の力を見極めよ」

「彼……カミュ・フロベールですか」

くっと、ミーノスが笑い声を立てた。

「……お言葉を返すようですが、彼が本当に何らかの『力』を持つとお思いですか？　成程、彼は突然変異体です。だが、それ故にまるで悪魔か何かのような『力』を持っているとはどうも思えない。……『あのお方』のお考えになることは、時折解りませんね。」

「お前は命に従えば良いのだ、ミーノス」

『パンドラ』は少し睫を上げてミーノスを見た。自分だって、信じている訳ではない。だが彼らの主の言葉は絶対なのだ。

「あのお方が必要だと仰るから命じている。あのお方の大志の達成の為には、カミュ・フロベールの力が必要なのだ……」
それがどんな力なのかは解らない。故に見極める必要がある。
『パンドラ』は有無を言わさぬ視線でミーノスを見下ろした。既に命は下った。今更異議を唱える余地などない。
「……解りました。出過ぎた真似をお許し下さい」
ミーノスは了解の意を示してかしこまった。暇を告げ、部屋を引き下がる。その唇には、どこか事態を愉しむような笑みが浮かんでいた。

「入場と共に演奏を始める。場所が場所だから弦は大きめ、管は少し音量を控えるように。では」
サガ・クライスト・フォイエルバッハは、ちらりと肩越しに入口の方を眺めやって指揮棒を取り上げた。講堂は集まった生徒たちの熱気に溢れている。譜面台に乗っているのは、ワーグナーのニュルンベルグのマイスタージンガー・第一幕前奏曲のスコア。毎年恒例の、新入生を迎える曲だ。
最初の協和音と共に拍手が講堂を埋めつくし、緊張した面持ちの新入生が入場してきた。アルテンベルク学院中等部からの持ち上りの生徒たちに混じって、色の違う制服がちらちらと見える。厳しい選抜試験を突破して入学してきた、通称『新入り組』の生徒達だった。
――おや。――――
ふと、サガは一点で視線を止めた。染めぬいたような深紅が、視界に飛び込んできたからだ。
――自然の色……？　違うな――――
染めたにしては美し過ぎる紅が、ゆっくりと花道を通り過ぎていく。それが目に眩しい程に感じたのは、隣を歩いていた少年の髪がまるで対をなすように見事な黄金だったからかも知れない。
入場終了と同時に指揮棒を振りおさめ、いまだ呆然とその紅から瞳を離せずにいると、背後からそれをからかうような小さな声が降ってきた。
「あの赤。染料の色じゃないぜ」
「ああ……何だ、シュラか」

後ろを振り返る。さっきまでトランペットのトップに座っていた男が、いつの間にやら前面に出てきている。
「さっき、間近で見たんだ。染めたってあんなふうにはならない。おまけに、髪だけじゃなくて瞳もあの色なんだ」
「それはまた……すると突然変異か」
サガは感心したように右手を口元へやった。実を言うと、赤い瞳というのはあり得ないことではない。色素が極端に欠落した白子の場合は、瞳の色も毛細血管の色が透けて紅になるからだ。だが、彼らの髪は赤にはならない。髪には血管が通っていないから、どちらかと言えばむしろサガのような銀髪になる。ついでに言えば、白子はこんな所へ日中堂々と出て来られる程の体力など持ち合わせていない。
「あいつが聞いたら、お前にゃ言われたかないと思うだろうよ」
感慨深げなサガの様子に、シュラは呆れたように言った。
「ふふ……私のは、確かに稀だがあり得ないことじゃない」
肩口を零れ落ちる柔らかい髪に指を絡め、笑う。黄金と言うよりも銀に限りなく近い髪と大理石のような肌の色は北欧に生まれ育った父のもの、ただひとつ鮮やかな色を呈したエメラルド・グリーンの瞳はハプスブルグの血を引く母のもの。その鮮やかな対比と稀にみる整った顔立ちのために、サガは珍しがられることが多かった。
「だが彼は正真正銘、全世界にただ一人だ。もっとも、彼に子が生まれればその血を継ぐ者も出て来るかも知れないが……」
「要注意人物だな。あの色じゃ、『新入り』いじめの格好の対象になる」
「流石学生統制部長、仕事熱心だな」
「……総会幹部の役目でもあるんだぞ？　こういうことは。」
シュラは横目でサガを睨み付けた。自分だって副総監だろう、と。
もう一言釘を刺してやろうとシュラが口を開きかけた時、急に辺りがざわついた。新入生代表誓いの言葉、と言う司会者の言葉に、かの赤毛の少年が立ち上がったのだ。
「何だ？　あいつが首席なのか？」
「そういうことになるな。代表を務めるからには。」
「大したもんだな……『新入り』が首席を取ったのは何年ぶりだ？」

目を丸くしたシュラの隣で、サガは養父である学園長から聞いた話を思い返す。今年はとても優秀な生徒が入ってきたと言っていた。名前は確か……

「……己を律し、敬虔なる学問の徒となることを誓います。新入生代表、カミュ・フロベール。」

――――……違う？――――

サガはびっくりして壇上の少年を見上げた。自分が聞いたのはそんな名前ではない。全科目九割五部以上を取得し、給費奨学生に指名されたその少年の名前は……

「奇麗なのは顔だけじゃないな。聞いたか？　今の見事な文章」

「……確かに。だが出来るのは彼だけじゃないぞ」

「え？」

「今年は、彼の他にまだ給費奨学をもぎ取った少年がいる」

「何だって？」

シュラは開けた口を閉じるのも忘れてサガを見た。

「あの問題で九割五分？　俺だって九割そこそこがやっとだったってのに……！」

「私は九割三分だ」

「……昔の傷をほじるなよ。だからあの年はお前が首席だったんだろうが！」

「拗ねるな。要するに彼は我々よりも上だと言うことだ」

サガはくすりと笑った。優秀な後輩。指導する立場としては、こんなに面白いものはない。

「今年は楽しめそうだな」

「お前……妙な癖出すなよ。」

「妙な癖とは？　私は優れたものを慈しんでいるだけだ」

ミロ・セガンティーニ。理事長から聞いた名前を思い出し、その姿を思い巡らせる。まだ出会ったことのない、今年の首席。

サガは赤い髪の少年をもう一度見た。好奇の視線に抗いもせず、悠然と顔を上げて前を見つめる姿は、雨風に打たれても微笑み続ける聖母像のようにも見え、凛然として美しかった。

機会があったら、彼等と話してみたい。そんな思惑に駆られて、サガは独り微笑んだ。

「カミュ！　カミュ！」
　プラタナスの木漏れ日の下で、ひときわ明るい声が響いた。
「遅くなってごめん！」
「ミロ、用事はもう済んだのか？」
「ああ。いろいろ聞かれて、なかなか放してもらえなくってさ」
　頬にまとわりつく黄金の髪をかき上げて、ミロが笑う。カミュはそれに応えるように、にっこりと微笑んだ。あの日、このプラタナスの並木道で再会を果たしてからというもの、ここは二人の待ち合わせ場所になっている。運よく同じクラスになれたけれど、ここで味わった感動は忘れたくなかったからだった。
「君のことも聞かれたよ。出身地も出身校も違うのに、どうして知っていたのかって。今日の君の宣言のことも誉めてた。あんな文章は、なかなか書けるもんじゃないってさ」
　二人で並んで歩き出しながら、まるで自分が褒められたかのようなミロの声が告げる。
「そんなことないよ。それに、あれは本当は首席の君がやる筈だったのに……」
「何言ってるんだよ、たった一点差じゃないか。それに文系科目は断然カミュの方が良かったし。俺、文才ないから、ああいうの苦手なんだ。変わってくれて、ほんと助かったよ」
「……奢らないんだな、君は……」
　三日前、二人は理事長の下に呼ばれたのだった。総合成績で僅か一点を争った二人のうち、どちらを代表にするかを決めるために。例年ならば首席が勤めることになるのだが、次席との差が一点しかないこと、カミュの語学力が並み外れて優れていたことから最終決定は二人に任せることにしたのだった。
　ミロのそばにいると、ほっとする。カミュは、眩しいものを見つめるかのように瞳を細めた。
「君みたいに、何でも出来る人たちを知ってるよ。でも、みんな近寄り難かった。君は……彼等の誰よりも優れているのに、すごく暖かいんだ」
「俺が……？　俺はそんなにきれいじゃないよ」
「どうして？」
「結構うじうじしてるし、嫌いなものは多いし、カミュみたいにいつもにこにこしてられないし……」

戸惑ったようなミロの口調に、カミュはくすりと笑った。あのアスコーナで出会った時にはあんなに大人っぽく見えたと言うのに、この素顔のあどけなさと言ったらどうだろう。

――そして……それは多分私も同じだ。――――

ミロに出会うまでは、いつも取り繕っていなければならなかった。誰に強要されたわけでもない。ただ、『神学者・ジョルジュ・フロベールの息子』という肩書きが重過ぎて――――

「そんなの……」

人間なんだから当たり前じゃないか。そう返そうとした時だった。

「仲のいいことだな」

突然、威圧するような声が背後から覆い被さってきて、二人はぎくりと立ち止まった。ちょうど校門を出て、少し人気のない通りに曲がったところだ。

「……何か、ご用ですか？」

動揺を押し隠して、カミュが後ろを振り返る。中等部の制服を着た大柄な少年が、七人。

――待ち伏せされたな……持ち上がり組の奴等か。――――

ミロは素早く辺りを見渡した。どう見ても好意的な雰囲気じゃない。ふてくされた視線の先がただ一人カミュを差しているところを見ると、連中の目的は生意気な『新入り』への制裁と言ったところらしい。

「ふん、すかしてやがる」

一番大柄な少年が、無理な笑いを浮かべながら言った。

「そんな悪魔みたいな色して優雅に代表宣言なんかかましやがって……知ってるか？　ここでは『新入り』は持ち上がり組の人間に出会ったら、まず挨拶することになってるんだぜ？」

「何だって？」

「何か文句あるか？」

思わずミロは、ぎりっと歯を鳴らした。新入りであることを卑下されたからではない。カミュを悪魔呼わばりしたことが、許せなかったのだ。

「いい加減にしろよ！　言っていいことと悪いことが……」

「ミロ」

小さく、カミュが呼んだ。まるでそれ以上の言葉を、押し止めようとするかのように。

「……あなた方が礼儀を守って下さるなら初めから私も挨拶

している。一体何の用ですか？　これから予定があるのですが」
　落ち着いた、と言うべきではあるまい。次に少年たちを見あげた顔は、平静と言うより氷のような無表情そのものだったのだ。
――カミュ　――
　ミロの胸を、焦燥が駆け抜ける。
「用だって？　とことん澄ました野郎だな……。そんなに知りたいなら、教えてやるよ。俺たちの目的は……」
　後ろに控えていた少年たちが飛び出し、退路を塞ぐ。
「二度とその生意気な口きけなくしてやることだ！」
　ざっと、靴が砂を咬む音がした。反射的に身を屈め、飛んできた拳をかわす。風を切る気配がすぐ近くまで押し寄せて来て、カミュは思わず息を詰めた。だが、その拳はカミュの元までは届かなかった。ミロが、強い力で少年の手首を掴んだのだ。
「……ふざけるなよ。落ちこぼれるのは勝手だが、そのツケを他人に払わせるんじゃない。逆恨みもそこまでいくと可愛げないぜ」
「何だと！」
　ミロはほくそ笑んだ。何とかして、彼等の注意を自分に向ける必要がある。
「相手になってやるよ。お前らなんかに頭を下げる気はない。偉そうな口は俺を下してからきくんだな！」
「こいつ！」
　たちまち、乱闘騒ぎになった。ミロの軽く素早い動きが、次々に少年達の膝を折っていく。カミュもまた流れるような動きで当て身を食らわせ、顔に似合わない喧嘩ぶりで善戦していた。何か護身術でもやっていたのかも知れない。無駄のないカミュの動きに感心しつつ、ミロはそう思った。
「……畜生！」
　したたかにひじ鉄を食らってしゃがみ込んだ少年が、苦し紛れにカミュの右足を掴む。
「あっ……！」
　カミュの上体が、バランスを失ってぐらりと傾いだ。
――カミュ！――――
　ミロの瞳が見開かれる。
「やめろ！　そこまでだ！」

しかし、惨劇は起こらなかった。カミュの上に振り上げられた足が降ろされる前に、厳しい声が仲裁に入ったのだ。
「……お前達、入学早々威勢のいいことだな。問題があるなら、暴力によらず口頭で解決しろとあれほど注意した筈だが？」
「あ……シュラ先輩……」
一斉に、少年たちの表情が色を失う。ざわっと、攻撃的な気配が退いた。ミロは知らなかったが、アルテンベルクではシュラと言えば大明神の如き存在だったのだ。
「ふん……喧嘩にしては随分人数に差があるようだな。何が原因だ？　場合によっては俺が成敗してやってもいいが」
淡々とした口調が続ける。
「まさか、新入りを排除しようとかいう下らない企みじゃないだろうな？　そういった根拠のないいじめは厳罰だと言い渡してあるんだからな」
「すっ……すみません！」
しらを切るゆとりもなく、膝をついた仲間を助け起こすと、少年たちは文字通りばたばたと逃げ去ってしまった。
後に残ったのは、祭りが終わった後のような、奇妙な沈黙。
――何て奴だ！　たったひと睨みで――――――
「シュラ……アレク・シエラハルト・フォン・リヒテンシュタイン先輩ですね？」
カミュが、瞳を和らげて訊いた。
「……知っているのか」
「はい。友人がここに来ているので。助けて頂いて、本当に有り難うございました」
深々と、カミュが頭を下げる。ミロも慌ててそれに倣った。あまりに鮮やかな登場ぶりに、礼を言うのを忘れていたのだ。
「いや……これが役目だからな。気にしなくていい。……もっとも、一方的にいじめられていると言った様子ではなかったようだが」
先程の見事な交戦ぶりを思い出し、シュラがくすりと笑う。成程、今年の『優等生』はどうやら頭が切れるだけではないらしい。
――リヒテンシュタイン……？　すると隣国リヒテンシュタイン公国の公子か！――――
どうりで、逆らえない筈だ。ミロは半ば呆れたような瞳でシュラを見つめた。
「何て顔をしている？」

シュラが笑いながらミロに問う。
「あ・・すみません！」
「謝らなくていい。お前みたく素直な反応をした奴は初めてなんでな。名前は何て言うんだ？　・・ああ、カミュ、お前は知っている」
ミロはまっすぐにシュラを見た。真面目な顔をしていると近寄り難いが、こうして笑っていると案外笑顔が優しい。
「ミロ……ミロ・セガンティーニと言います」
「ミロ、か。覚えておくよ。さっきの喧嘩ぶりは、本当に見事だった」
片手を上げて、くるりと踵を返す。
「あの！　待って下さい！」
いきなり、カミュが声を上げた。
「すみません……総監室の場所を教えて頂きたいのですが……」
「総監室？　一体何の用だ？」
シュラがびっくりしたように立ち止まり、振り返る。
「シオン・クルワール先輩にお会いしたいのです」
「シオン……？　それじゃさっきの友人ってのは総監のことか？」
「はい」
シュラは内心で舌を巻いた。あのシオンの友人とは、とんでもない。
「成程……するとフロベールと言うのはあの神学者のフロベールなんだな？」
シオンはその名の示す通り、シオンの町を守る大司教の息子だ。その穏やかな性格の為に生徒からの人望も篤く、大多数の支持により生徒総監の地位に就いていたが、何分あまりに聖職者じみていて『友人』と称せる人間は殆どいないのだった。その彼を知っていると言うことは、カミュも矢張りカトリック関係の人間なのだろうとふんだのだ。
「そうです」
カミュが遠慮がちに答える。あまり知られたくはなかったが、ここまではっきりと尋ねられたら答えない訳にはいくまい。
――そうか……それで――――――
ミロはやっとさっきのカミュの言葉を理解した。カミュの回りにいた『優秀な人々』とは、未来の聖職者だったのだ。

「……解った。管理棟の四階に、生徒会関係の部屋がある。今日は全員出払っているから、後日訪ねてみればいい」
優秀で、喧嘩に強くて、生徒総監の友人。シュラは二人を交互に見つめて笑った。どうやら、これまでの『新入り』の常識を破る二人であることは確からしい。サガではないが、なかなかこれからが楽しみだと思った。

学期の初めというのは、何かと慌ただしい。全ての機関が活動を始めるのだから忙しくて当たり前なのだが、取り分け学校生活のほとんどを統括する生徒会幹部の活動は、まさに多忙を極めていた。入学式が終わったと思えばすぐに次の仕事が待っている。
「それで今年の秋合宿の話ですが」
サガは手にしていた書類の束を置くと、話をあらためてシオンを見た。放課後の総監室。いつもそばに控えているムウが紅茶を煎れている。
「候補地はイタリア・ドイツ・フランス・イギリスなどの主要都市に加えコペンハーゲンやストックホルムなどの北欧の都市も挙がっています。今年は候補地が多いので、一グループ五・六人の少人数にしたいのですが」
「それはいい。だが指導する君達の人数は大丈夫なのかい？」
シオンはムウの差し出した紅茶のカップを口に運びながら首を傾げた。
「ええ。何とかなるでしょう。皆単位は足りているようですし……」
「君の学年は優秀だからね。我々の時は半数が補習に回ってしまい、大変だった」
カップを置き、当時を思い出したようにくすりと笑う。毎年恒例の新入生秋合宿は、新入生だけでなくリーダーを務める上級生にも大きな山場なのだった。
「新入生にとっては初めての合宿であり、また初めて研究活動に触れる機会だ。我々は君達に大したことを教えてやることも出来なかったが・・折角一か月もあるのだから、出来るかぎり懇切に指導してやって欲しい」
「解りました」
深く頷いて、カップに手を伸ばす。とその時、扉を叩く音

がした。
「総監、面会を申し出ている者がいるのですが」
「誰かな」
「何でもカミュ・フロベールとかいう新入生で……」
「ああカミュか。通しなさい」
サガは口に運びかけたカップを降ろしてシオンを見た。カミュと言えば、確か……
「カミュとは……あの新入生代表を務めたカミュですか？」
「そうだよ。私の父と彼の父君が友人なので、彼のことは幼い頃から知っている」
「成程……」
サガは納得した。彼が神学者フロベールの息子だと考えれば、ごく自然なことだ。
「お話中すみません」
扉がゆっくりと開いて、見事な赤い髪の少年が入ってきた。
「ああ、カミュ、久しぶりだね。随分大きくなった」
「先輩もお元気そうで何よりです」
「お父上は？　変わらずご研究に励んでいらっしゃるのだろうね？」
「ええ。あの人はあれが生き甲斐ですから」
花のような容貌が暖かくほころぶ。サガは思い掛けない少年の表情に、微かに瞳を細めた。こんな微笑みが出来るとは思わなかったのだ。入学式の時に見た彼の表情は、石のように静かだったので。
「……おや？　友達が待っているのかい？」
「え？」
ふと扉の奥を覗いて、シオンが訊いた。明るい黄金の髪が、リュウゼツランの鉢植えの影に見え隠れしている。
「ええ。これから一緒に寮に帰るので……」
「入ってもらいなさい。折角だから」
「はい」
カミュはつと踵を返すと、扉の向こうに向かって手招きした。少年は数瞬の間躊っていたようだが、やがてカミュに導かれておずおずと総監室へ足を踏み入れてきた。癖のある長めの髪と、深い青の瞳。サガはしばらくその顔を見つめて、ふと思い当たった。……彼は、入学式の時にカミュの隣に並んでいた少年だ。
「初めて見るね……第九学年からの新入生かな？　私はシオ

ン・クルワール、現在第十三学年で生徒総監を勤めている。こちらは、サガ・クライスト・フォイエルバッハで、第十一学年の副総監だ。君は？　名前を聞かせてくれるかな」
「はい……ミロ・セガンティーニと言います」
――ミロ……！　この少年が――――――
　理事長の言葉を思い出し、目を見開く。明らかに驚いた表情をしていたのだろう。少年が、不思議そうにサガの顔を見た。
「あの……何か？」
「いや、済まない。実は理事長から君の話を聞いていたので、少しびっくりした」
「俺の話……ですか？」
「そうだ。ずっと会ってみたいと思っていたよ」
　サガはやっと気を落ち着けて、口元に微笑みを浮かべた。何という一対だろう。全く別種の輝きを宿した二人が、学年の首位を分け合ったのだ。
「ミロ・セガンティーニ。選抜試験総得点、九七八点。今年の本当の首席は君だろう？　給費奨学生君」
「どうしてそのこと――――――！」
「彼は理事長の息子なのだよ」
　シオンが微笑ましげに笑った。この少年は反応の一つ一つが素直で、心を和ませる。
「理事長の息子……！」
「養子だけれどね」
　サガも同じように感じたらしかった。楽しそうに腕を組んで二人を見つめると、にっこりと微笑んだ。
「これはやり甲斐がある、と言うべきだろうな。新入生秋合宿の話は聞いただろう？」
「え・・ええ」
「そのグループリーダーに、我々第十一学年の上位成績者がつくことになっている。是非とも君達の所属するグループを受け持ちたくなったよ」
　この二人ならば、かなり高度な研究もこなすに違いない。彼等の能力を最大限まで引き出す方法を思い巡らす一方で、サガはどうやってシュラとの下級生争奪戦に勝とうかと考えていた。

二

入学式から一週間が過ぎた。ミロとカミュがアルテンベルクの双璧と呼ばれるサガとシュラに見込まれた噂はあっという間に広がり、今では他のクラスからわざわざ二人を見物しに来る者が現れるまでになっていた。

二人とも決して目立ちたがりな性格ではない。もの珍しげなギャラリーには正直言って辟易していたが、表立って『新入り』を排除する動きがなくなったのは有難いことだった。喧嘩も、窮地に追い込まれれば受けて立つが、決して好きな訳ではないのだ。

「今朝、こんなものが届いたんだけど」

だから、その奇妙な手紙を受け取った朝、カミュは迷わずそれをミロに見せた。

「何だこれ？　呼び出し状？」

ミロは字面を追ってみる。案外丁寧に書かれた文字が、放課後に話があるから一人で来てほしいこと、待ち合わせの時間と場所とを示していた。

「どう思う？」

「署名入りだな。第十一学年、ジークフリート・グリース。本当かな」

「あまり信用出来ないけれど……相手が先輩では無視する訳にもいかないだろう」

カミュは小さく溜め息をついた。今までは同学年だったから良かったが、先輩が相手では動きにくいことこの上ない。

「くれぐれも内密に、ってのが怪しいな。どっちに転んでも有難くない話だぜ？　きっと。」

「だけど喧嘩はしたくない。だから行くだけは行ってみるよ。それで一応義理を立てたら、すぐに戻って来る。……もし戻って来られなくなった時は……」

「分かってるよ」

ミロはにっこり笑って片目をつぶって見せた。

「五分過ぎたら迎えに行くから」

五限目は、選択科目の時間だった。カミュは父の言いつけで、神学のクラスを取っていた。ミロはドイツ近代史だ。そのことを告げた時のミロの表情が幽かに強張っていたことを思い出し、カミュは瞳を伏せた。何故、あんな表情をしたのか。そして、何故そんな表情をしなければならないような科目を選択したのか。

ドイツ近代史は、そのまま近代西欧史の中核になる。鉄の宰相ビスマルクに始まり、ヴィルヘルム二世による対外政策、戦間期の空前のインフレ、大恐慌、ナチスドイツの第三帝国……

――ナチス・・第三帝国？――――

そこまで考えて、カミュはふとあることに気がついた。ミロは自分のことをあまり話したがらない。以前聞いたサヴォナローラの姓にしても、『忘れて欲しい』と釘を刺されてしまった。

――もしかしたら。――――

あの輝くばかりの金髪のために気付かなかったが、ミロはユダヤの家系なのだろうか……

「何をそんなに悩んでいるんです？」

不意に、涼しげな穏やかな声がカミュの思考を遮った。

「え……？」

慌てて顔を上げ、声の主を見つめる。目の前にいたのは、旧約聖書を手にした背の高い――――――

「フロイア！」

カミュは思わず声を上げた。フロイア・クリスタル。それは紛れもなく、五年前に別れた幼なじみの姿だったのだ。

「信じられない！君がここへ来ていたなんて――――――と、」

そこまで言って、ふとある考えがカミュの頭をつつく。

……しまった。フロイアは、ひとつ年上だ。

「すみません、貴方は今は私の先輩だ」

「いいんですよ。そんなことは気にしないで下さい」

フロイアは微笑ましげに笑った。

「貴方は・・変わらない。相変わらず年下に対してもそうなんですか？」

カミュは、誰に対しても優しく丁寧な言葉づかいだったフ

ロイアを思い出し、訊ねた。上下関係が厳しい修道会の中にあって、ただ一人奢らずに微笑んでいた人。彼にとっては師の息子であるカミュへの敬語が取れたのも、出会ってから六か月後のことだったのだ。

「いちいち年上と年下を分けるのが面倒なだけですよ」

答は、いかにも彼らしい、謙虚なものだった。

「……君は変わりましたね。見違えましたよ。随分背も伸びたし、何よりも楽しそうだ。アルテンベルクは、楽しいですか？」

温かな瞳がカミュを見つめる。五年前の記憶が、次々に蘇って来る。

あの頃、カミュの瞳はいつも遠くを見ていた。あまり外へ出してもらえず、同年代の子供と遊ぶことも出来ずに、堅苦しい神学の書物を読まされていた。カミュは遊び方を知らない。瞳を輝かせて同年代の子供である自分を見つめるカミュを、フロイアはよく不憫に思ったものだ。

「ええ。何もかも新しいことばかりで、毎日が楽しみなんです。素晴らしい友人にも巡り合えたし……」

口元をほころばせてカミュは言った。そう。ミロに出会えなければ、本当に今の自分はなかったのだ。

窓際の席に、午後の光が差し込んで来る。途切れた雲から光が数条の束になって、カミュの艶やかな髪に降り注いだ。フロイアは言葉を紡ごうとして、思わず息をのんだ。それは瞳を逸らすには、あまりにも幻惑的な光景だったのだ。

――カミュ……？――――

フロイアの身体を、何かが強烈に駆け抜ける。

「静かに！　授業を始める」

担当教師の呼びかける声が教室に響く。その厳しい調子に救われて、フロイアは正面に向き直った。朗々と語られる聖書の言葉の合間に、時折隣を伺い見る。ペンを走らせながら煩わしそうに髪をかき上げるカミュの横顔が、先程までとは全く別人であるかのように見えた。

「時間は？　まだ大丈夫なのか？」

「あと十分ある。どうせだからぎりぎりに行くよ」

カミュは四つにたたまれた紙片を開いて、またひとつ溜め

息をついた。約束の、椈の林まで来ている。相手の全貌が何一つ掴めていない中に突入するのは、はっきり言って気持ちのいいものではない。
「心配するなよ。危なくなったら絶対助けに行くから」
「うん……」
カミュは生返事をした。
彼は、実はそのことも心配していたのだった。臨機応変なミロのことだから、自分たちだけではかなわないと知れば人を呼ぶなり何なりの方法を講じてくれるだろうが――あまりにカミュが危険な状況に追い込まれてしまったら、何よりも先に飛び込んで来るような気がする。
「……さっきさ、カミュ背の高いひとと一緒に歩いてただろ。すごく優しそうな人。知り合いなのか？」
何とかカミュを元気づけようと、ミロは話題を変えた。
「ああ、彼？　フロイア・クリスタルって言うんだよ。ひとつ先輩だ。五年前まで、神学の勉強をする為に私の家に居候していた。まさかこんなところで出会えるとは思わなかったよ」
「フロイア……？」
「うん」
嬉しそうな声が返って来る。
ミロの目論見は成功した。カミュは笑ったのだ。まるで光が差したように。
――カミュ……？――
ちくりと、痛みがミロの胸を刺す。
――……何考えてるんだ、俺は！――
ミロは、慌てて胸に起こった痛みをにじり消した。カミュに友人がいるのは当たり前じゃないか。
ミロには、友人と呼べる人間はカミュしかいない。そしていつの間にか、カミュさえいれば他の友人なんて要らないとまで思っていた。
――こんなつまんない人間に……カミュがなっちまえばいいと思っているのか　俺は！――
「ミロ？どうかしたのか？」
カミュが不思議そうにミロの横顔を覗き込む。
「何でもないよ。ちょっと宿題忘れてたの思い出した」
ミロは慌てて笑った。踏み締めた土の下で、小枝がぱきんと小さな音を立てる。握り締めた手のひらに、爪が食い込ん

で小さな傷をつけた。

「呼び出して悪かったな」
約束の場所でカミュを迎えた声は、カミュの予想に反して落ち着いていた。
「いいえ。お話とは、何ですか？」
カミュは全身の緊張をほんの少しだけ弛めて、自分より頭ひとつ以上は背の高い青年を見た。ジークフリート・グリース。偽名を騙るような人物にも見えない。
後ろに、数人の仲間が控えている。全員が胸に白い星形の徽章をつけている点が、一般の生徒とは違っていた。
「噂通りだな。流石サガやシュラが見込むだけはある」
これだけの上級生に囲まれてたじろぎもしないカミュを見て、ジークは苦笑した。大したものだ。
「実は、我々は『白い星』という組織を組んでいる。表向きはただの学生集団、実はスイスを守るために結成された全国組織のベルン支部だ。我々は、スイスからフランスやドイツ、オーストリアの圧力を排除することを目的としている。奴等はスイス人になりすましてこの国に潜り込み、自分の手は汚さずにスイス国内のフランス人やドイツ人を煽って分裂させようとしているからな」
カミュは困惑した。どうも、予想していたことと展開が違う。
「そこで」
後輩の動揺を眺めつつ、ジークは淡い金色の髪をかき上げた。
「単刀直入に言おう。お前は今年の学年首席だが、こういった類の奴等の口車には絶対に乗らないでほしい。学年のトップが動けば、下は目茶苦茶になるからな。出来れば――――――」
薄い唇に笑みを浮かべる。
「是非とも我が『白い星』に加入してほしい。つまり勧誘だが、どうだ？」
ジークは腕を組んでカミュを見た。まだ『少年』の域を出ていない彼は、ともすれば少女のようにさえ見える。
「……それは……あまりに急なお話なのでお答え出来ません。

先輩はどうして私を仲間に加えようとなさるのですか？　まだ私がどんな人間かも解らないのに」
　カミュはまっすぐに答えた。たとえ脅されても、こういう場面で安易な答えをするべきではないと、厳しく教えられてきたからだ。
「何故って？」
　ジークは苦笑した。
「それはお前が優秀だからさ。それに……最近の党員には花がないからな」
　一瞬何が起こったのか、カミュには解らなかった。ジークフリートはカミュの頬に手をかけ、顔を仰向かせ――唇に唇を合わせたのだ。
――カミュ！――――
　物陰で様子を窺っていたミロが息をのむ。
「――――止めろっ！」
　ばしっと手のひらが頬を打つ音が響いた。全身をわななかせて、カミュがジークを睨みつける。白い頬が、怒りのために一瞬で赤く染まった。
「私に触れるな！……汚らわしい！」
――え……？――――
　ミロは、思い掛けないカミュの態度に一瞬足を止めた。今……カミュは何と言った？
――……そうか。カミュは――――
　神学の権威の息子で、未来の聖職者の友人。同性に向けられた愛情など、許せる筈がない。
「何をする！よくもグリース様を……！」
　後ろで控えていた取り巻きが、色を失う。驚いたのは、彼等も同じらしかった。主の指示を待たずに、彼等は一斉にカミュに飛びかかった。
「カミュ！　こっちだ！」
　ミロも慌てて物陰から飛び出し、カミュに向けて手を差し伸べる。横合いから飛んできた身体に肘当てを見舞って、なぎ倒しつつ木々の間を走り抜ける。その後ろ姿に石を投げつけようとした少年に向かって、ジークフリートは手を振りながら制止の命を下した。
「やめろ。もういい」
「しかし、グリース様……」
「いいといっている。少し悪戯が過ぎたようだ」

ジークは打たれた頬に手を遣ってくすりと笑った。きれいなだけのご子息だと思っていたら、なかなかやってくれる。
「ますます欲しくなったな……あの二人」
おそらく彼等は、初めから脱出法を計算していたのだろう。ジークは二人の姿を思い浮かべた。だとすればあの金髪の方が、シュラの言っていたミロ・セガンティーニなのに違いない。
「シド。あの二人についての情報を集めろ。出来るだけ詳しく」
隣に控えていた青年に、短く指示を与える。
「解りました」
シドはジークの横顔を見つめながら答えた。その表情には、不安の色が浮かんでいた。

「ここまで来れば……」
ミロは跳ね上がる息をつきながらカミュを振り返った。カミュも、かなり息を乱して立ち止まる。
「ミロ、済まない……。ついかっとなって……」
「気にするなよ。あれは絶対あいつが悪い」
ミロは腕を組んで言い切った。ああいうのは、お互いの合意のもとにやるべきだ。
「許せなかったんだ！あんなこと……重罪なのに……」
きりっと唇を噛み締めて、地面を睨み付ける。カミュは先刻の屈辱を思い起こして身体をわななかせた。
悪魔とののしられるのは仕方がない。それは血の色の髪と瞳を持って生まれた業だと思う。だが、彼等は何故自分をあんな目で見るのだろう？
恋人なら、街へ行けばきれいな女の子が沢山いるではないか。
「カミュ……」
ミロには、カミュの心の声が聞こえていた。そして、そんな風にカミュを踏みにじる者たちを許せないとも思った。カミュに触れたい気持ちは分からなくもない。だが、それはカミュを傷つけていい理由にはならない筈だ。
「ああ……でも、私は言ってはならない言葉を投げつけてしまったんだな……」
ふと我に返ったように呟いて、カミュは、悲しげに瞳を伏

せた。自分の吐いた言葉が耳に蘇る。他人に向かって『汚らわしい』と言える程、人はきれいではない。
「うん……でも俺は、そんな言葉をもっと平気で口にする奴等を知ってる。カミュは後悔してるんだから、それでいいんだと思うよ。次から言わないようにすればいい」
「ミロ……」
「な？」
ミロは慰めるように笑った。かつて散々ミロを罵った人々は、そんな心を持ち合わせていただろうか？……答えは否だ。
「見て御覧よ。カミュ、あれは練習所じゃないか？」
ミロの明るい声につられて、カミュは前方を見た。小さなホールを中心に配した木造の建物群が、木々の間を縫って立っている。
「さっきから聞こえてたオーケストラの音はあれだよ、きっと。行ってみようよ。俺達まだ何のクラブにも入ってないし」
「あ・・ああ」
ミロに引きずられるようにして、カミュは歩き出した。弦の分奏が聞こえてくる。少し音楽に触れて心を静めたい。そう、カミュは思った。

練習室は、珍しく賑やかな話し声に満ちていた。入学式の『マイスタージンガー』のお陰で入部希望者が殺到し、団員はその対応に追われて練習どころの騒ぎではなかったのだ。
「そっちはどうだ？　管希望者は！」
「全パート定員オーバーだ！　おまけに経験者がほとんどいない！」
「参ったな……オーディションという訳にもいかないし……」
サガはふうっと溜め息をついた。例年ならば初めから経験者しかやって来ないし、人数もここまで多くはない。アルテンベルクのエリート集団と言われる管弦楽団に入部しようなどという者は、それなりに自負のある者ばかりだったのだ。
「先輩、大丈夫ですか？　随分お疲れのようですが」
「ああ、ソレント。ちょうどいい、しばらく代わってくれ」
サガは片手に黄金のフルートを持った後輩を捕まえると、そう言い置いてさっさと控え室に入ってしまった。
「……自業自得とは言え……あの二人の影響がここまで波紋

を投げかけて来るとはな」
　クーラーからアイスティーを取り出し、グラスに注ぎながら一人ごちる。
「あの二人？」
　同じく休憩を取って控え室にやって来たシュラが、その独り言を聞きとめて繰り返した。
「ミロとカミュだ。彼等が新旧の壁を取り去ってしまったから、今年は『新入り』が沢山やって来ている。そのうち、この言葉も死語になるかも知れないな」
「成程……」
　二人は顔を見合わせて笑った。確かに目立つ二人だが、彼等が有名になる原因を作ったのは他でもない、自分達なのだ。
「飲み物は？」
「いただこう。あればアイスコーヒー」
　サガが注いだグラスを受け取り、一気に飲み干してひと息つく。と、ほっとする間もなく入口のドアが開いた。
「休憩中済みません。また二人見学希望者が来たんですが」
「見学？　入部でなくて？」
「はい。合奏風景を見せてほしいとのことなんですが……後日出直すように言いましょうか」
　サガは右手を顎にやってしばらく考え込んだ。合奏を見せろと言うのは、なかなか面白いかも知れない。
「いや、構わない。すぐに行こう」
　シュラに目くばせして立ち上がる。シュラもやれやれ、と言うようにグラスを置いて腰を上げた。

「成程……君達か。」
　やって来た二人を見るなり、サガはくつくつと笑った。意外と言えば意外だし、もっともだと言えばもっともにも思える。
「あの……何かあったんですか？」
　ミロは恐る恐る訊ねた。笑われるようなことをした覚えはないのだが。
「いや、こちらの話だ。いきなり合奏風景を見せろといってきた新入生は初めてなんでね。どんな人物かと思っていた」
「お前達のお陰で今ここはてんやわんやなのさ。御覧の通り、

入部希望者が溢れている」
「はあ……」
　ミロは困ったような生返事をした。何が自分たちのせいなのか、良く解らない。
「そんな顔をするな。お前達は俺達にもやれなかった偉業を成し遂げたんだからな」
　シュラが片目を瞑って見せた。二年前、矢張り『新入り』だったシュラは何とかこの悪習慣を撲滅しようとしたが、結局叶わなかったのだ。
「これから全体練習に入る。曲目はブルックナーの交響曲第五番だ。入部希望者はこの練習を見てから所属パートを決めるように。入団制限はしないが、その代わりついて来られない者には即刻退団してもらう。団長、それで良いですか？」
　こんな状況だ。案外その方が早いかも知れない。拍手で全員を黙らせておいて、サガはそう告げた。
「ああ、構わんよ」
　第十三学年の団長、童虎がのんびりと言った。彼はスイスで生まれた中国人だ。
「それでは準備を」
　目茶苦茶だった練習室が、あっという間に片づいていく。
――この人は……生まれながらに人の上に立つ人間なんだな――――
　鮮やかな統制ぶりを目の当たりにして、ミロは呆れたようにため息をついた。

「どう？」
「凄いな！　流石に名高いアルテンベルクのオーケストラだ」
　ミロの弾んだ問いに、カミュは感嘆の溜め息をついて答えた。ミロに誘われてやってきた形のカミュだったが、元々音楽を知らない訳ではなかったからすぐに溢れる音の饗宴に夢中になってしまったのだ。
「レベル高いなあ。入ってもついていけるかな」
　ミロは厳しい眼差しをオーケストラに注ぎ続けている。芸術家の町アスコーナで育ったミロには、音楽は単なる遊びではない。
「次……フィナーレが始まるよ」

オーケストラから目を放さず、ミロが囁く。カミュは微笑ましげに、そんなミロの姿を見つめた。

それは、壮大な音の本流だった。うねるようなフーガの主題に取り囲まれつつ現れる主調のコラールが、圧倒的なフォルテ・シ・シモで七十五分の終幕を演じる。作曲者自身が『幻想的』と称したこの第五番は、ほかのどの交響曲よりも宗教的な構成を持ちながら汎神的な輝きに満ちていた。

ミロは、神を身近に感じたことはない。父も母も、無神論者ではなかったがそういったことをミロに教えてはくれなかったからだ。

厳格なクリスチャンの家に育ったカミュには、この曲はどう聞こえるのだろう。最後の変ロ長調主和音の余韻を聴きながら、ミロはそう思った。

「……さて。希望を訊こうか」

サガが、額の汗を拭いながら指揮棒を置く。

「これからパート練習に入るから、自分で希望するパートに行くように」

「ミロ、どうする？」

カミュがまだ余韻に浸ったままのミロをつついた。

「あ・・ああ」

ミロは二、三度頭を振って、頭の中身を現実の世界に引き戻した。音楽に触れると、どうもその世界にトリップしてしまっていけない。

「その様子だと、もう決まったみたいだな。君はヴァイオリン・パートに入るんだろう？」

「え？」

思い掛けない言葉に驚いて、ミロはカミュの方を振り向いた。ヴァイオリンだって？

「違うのか？　怖い程真剣な眼差しでヴァイオリンを睨んでたから……」

「そ・・そうかな」

驚いた瞳の色を隠しつつ、ミロはわざと素っ気なく返した。カミュの言葉は、多分正しい。多分と言うのは、自分でも判らない程曲にのめっていたからだ。

――ヴァイオリンは……だめだ。――

即座に、ミロはそう思った。どんなに惹かれても、あれは二度と弾かない。あの楽器は……あまりにも素直に感情を表し過ぎる。
「俺はやるなら管にするよ。でも、まだ入るかどうかだって決めてないんだし……」
「私は入部するよ」
至極あっさりと、カミュは告げた。ミロが何かを隠しているのを悟ったからだ。
「それで、ヴィオラを弾く。弦楽器はやったことがないけれど……」
「ヴィオラ？　随分目立たない楽器を選んだんだな」
普通、初心者はヴィオラの音など聞き分けられない。驚いたようなミロの言葉に、カミュはにっこりと笑った。
「いつも、真ん中で音を支えているだろう？　ああいうのって好きなんだ」
「……何かやってたのか？」
「歌をね。少年合唱団で、ずっとアルトをやっていた」
微笑んだ瞳が、ほんの少し陰った。半分は本当。だが、半分は嘘だ。

ミロがあまり思い出したくない過去を抱えていることは、初めて出会った時から知っていた。だが間近に接するようになって、カミュはミロの彼自身でさえ気付いていない感情に気付いたのだ。
遠い昔に捨てた筈の過去を、もう一度愛したいという感情に。
――やるなら管だって？　嘘だ。君の瞳は、ひたすらヴァイオリンばかりを追っていたじゃないか――――
だからカミュは、ヴィオラを選んだ。ミロがヴァイオリンを捨ててしまわないように。でも、自分の弾く音がミロを苦しめたりしないように。他のどの楽器よりも一番ヴァイオリンに似て、ヴァイオリンではない楽器を選んだのだ。
「さて、お前たちはどうするんだ？他の奴等は行っちまったぞ？」
不意に、頭の上からきつめのバリトンが降ってきた。びっくりして顔を上げると、トランペットを手にしたシュラが仁王立ちになって見下ろしている。
「シュラ先輩！　素晴らしいフィナーレでしたね！」
「お世辞はいい。お前もうじうじしてないでさっさと決めろ。

やるならやる、止めるなら止める。でないと練習の邪魔だぞ？
カミュはもうヴィオラにきめたようじゃないか」
ぽんとミロの頭を小突いた表情は、不機嫌を装っているように見えて、何故かミロを引き止めたがっているようにも見えた。ふと瞳を移すと、向こうからサガが興味深げにやって来る。ミロは覚悟を決めた。こうなったら、なるようになれ、だ。
「カミュはヴィオラだって？　ミロ、君はどうするんだ？」
笑みを含んだ声が訊ねる。
「ホルンパートに……入ります。どうかよろしくお願いします」
ミロはまっすぐに顔を上げた。

三

九月も半ばを過ぎ、初めのころの喧騒はようやく落ち着いて、やっと秋らしい雰囲気がアルテンベルクの空を満たし始めていた。サガは他の用事をキャンセルして、久々に少し早めの練習室を訪れた。ロッカーに行き、ヴァイオリンの中でも三大名器と言われるアマティを取り出す。ポジションは第一ヴァイオリンだが、学生指揮者を兼ねているため自分の練習時間があまり取れないのだ。
第一楽章の難所、アルペジオのフーガに取り組んでいると、聞き慣れた声が音響版を張った戸口から聞こえてきた。
「何だ？　今日は早いんだな」
「たまにはまともに練習したいんでね。邪魔は遠慮して貰おう」

「甘いな」
倉庫から椅子を取り出し、サガの目の前に据えて腰を下ろす。
「邪魔するなと言われると邪魔してやりたくなるたちなんでね」
「悪い癖だ。身を滅ぼす前に早く直すことだな」
「御互い様だろう」
憎まれ口に憎まれ口で報いてやってから、さて、とシュラは真面目な顔をした。
「ミロのことだが。あいつ、転パートさせた方が良いんじゃないのか？」
「転パート？……どこに。」
「決まってるだろう。ヴァイオリンだ」
サガは構えていたアマティを降ろしてシュラを見た。ミロは先日ホルンパートに入り、その音色の美しさから一番ポジションのアシスタントに入ることが決まったばかりだったのだ。
「……何故？　彼は以前にトランペットをやっている。全くの初心者ではないからファーストを吹かせることに決めたんじゃないのか？」
「……しらを切るな。ミロの音を聞いただろう。あれは絶対に弦をやってる。それもかなり本格的にだ」
初めシュラは、ミロには四番ポジションを吹かせるつもりだったのだった。初心者には、音程の取りにくいホルンで旋律を吹かせるのは難しい。
四番ならほとんどが分散和音だから、比較的やりやすいだろうと思ったのだ。
だが、ミロはその難しい旋律をこなしてしまった。こういった場合、一番問題になるのは技術ではない。出している音が正確な音程より高いか低いか、それとも合っているのか――――つまりは音感だ。
「あいつは、俺でさえ考え込むようなレベルの高低まで聞き分ける。あれは管で培った音感じゃない。弦の――それも一番操作が微妙な楽器で養われたものだ」
「……成程。」
サガは大きく息をついて考え込んだ。その可能性については、サガも全く考えなかった訳ではなかった。だが、仮にそうだとしても何故ミロはヴァイオリンを選ばなかったのか。

ホルンへの興味以外に、何か深い理由があるような気がする。
「それは……経験者に入って貰えば有り難いが。このままだとあのジュリアン・ソロが未来のパートリーダーということになるからな。彼は確かに下手ではないが、人格的に問題がある。だが……」
ミロと同じクラスの、海運王の我儘子息を思い出して眉を顰める。今年のヴァイオリン経験者の中では、実力はトップだ。
「矢張りミロの希望を優先させるべきだろう。それに、ホルンを吹かせても音は決して悪くない。三年立てば、立派なホルン・プレイヤーになるんじゃないのか？」
慎重にそう結論を下し、サガは顔を上げた。目の前にある、自分よりも暗い緑の瞳を覗き込む。と、シュラがみるみるうちに表情を変えて笑った。
「お前、その言葉に二言はないな？」
「何だ？　急に。」
「決めた。お前がその気なら、俺は明日からホルンに移る」
「何だって？」
流石にサガは驚いて声を上げた。冗談じゃない。それではトランペットのトップに穴が開いてしまう。
「何を馬鹿なことを言っている。冗談は休み休み――――」
「悪いがこれは本気だ。俺がトランペットにいたのは、ホルンをやるならセカンドと決めていたからだ。はっきり言って、あんなに美味しいパートは他にないからな。だが、ヘタクソなファーストにつき合わされるセカンド程惨めなものはない」
「……言いたいことは判るがな……」
「ミロのトップでブルックナー。最高じゃないか。あいつがファーストを吹くなら、俺はあいつの音を最大限に生かしてやれるようなセカンドになるさ」
明るい声が意気揚々と告げる。シュラの陽気は止まるところを知らない。
サガは無力感に襲われながらも、一応の説得を試みた。
「だがミロはまだアシスタントだ。正式なファーストはミロじゃないんだぞ？」
「見てな。今年の冬迄には、レギュラーとアシスタントが入れ替わるぜ」
自信たっぷりなシュラの声が返って来る。

「全く……いい気なものだ」
サガは、やらせてみようかという気になった。自分は管楽器についてはあまり詳しくない。シュラがそこまでミロに入れ込むのなら、ベストコンビによるホルンを聴いてみたいと思ったのだ。
「どうせ止めたって止まらないからもう何も言わないが……その分だと忘れているな？　君は、次ブラームスをやる時にはチェロに入ると約束したんだぞ？」
「ああ、チェロは当分お預けだ。あれは一人でも楽しめるからな」
「……判った。もう二度と君は当てにしないことにしよう。しかし、君がそこまで入れ込むのも珍しいな。つくづく彼は只者ではないと思うよ」
「人のことは言えないだろう、サガ。お前も、随分付きっ切りでカミュを教えてるじゃないか。わざわざヴィオラパートまで行って」
身を乗り出して、シュラがサガの顔を覗き込む。サガは、思い出したように笑った。言われてみれば、その通りだ。
「……ああ、あの子は筋がいい。長い間アルトを歌っていた為だろうが和声音感が非常に優れている……まるでヴィオラを弾く為に生まれてきたような子だ。この冬には、舞台に乗れるだろう」
「まるで親馬鹿の心境だな。まだそれには若過ぎるぜ？」
開け放った窓から滑り込む秋の風が、譜面台の上の楽譜のページをぱらぱらとめくる。ひとしきり笑って気がつくと、オーケストラの団員が集まり始める時間まであとしばらくという時間になっていた。

「そうか……では、カミュは唇を奪われて激怒したと言うのだな？」
グランド・ハープの虹のような音が静かな部屋に響く。この優雅なロココ調の部屋の主『パンドラ』は、その美貌に似合わぬ言葉でそう紡いだ。
無論、普段からこのような言葉を使っている訳ではない。
「他愛のない。たかが接吻ぐらいで」
「彼は厳格なクリスチャンですから。彼にしてみれば大罪な

のでしょう」
　招かれた客人・ミーノスは、幽かに笑いを含んだ声で言った。
「それで？　お前はどうする？」
「思うに、彼は自分で考えているよりもはるかに強くキリスト教の戒律に縛られています。少々危険な目に遭わせたぐらいでは、『力』を発揮して自分の身を守る域には達しないでしょう。彼から理性を取り払い、本能が彼の行動を支配しない限りは」
「だが、これまでの攻撃は二回とも邪魔が入ったのだろう？　あのミロとかいう少年の」
　怖い程の緑の瞳が、ミーノスの灰色の瞳を射る。
「確かに。ですから今回は、彼のいない時に仕掛けます」
　ふと、ミーノスの唇に笑みが浮かんだ。彼はこうして唇だけで笑うと、整った容貌をしているだけに気味が悪い。
「彼は資金調達のためアルバイトをしている。その間を狙うのです」
「成程な。だがこれまでの失敗が生かされるよう心してやることだ。二度も逃すとは、お前にしては失策続きなのではないか？」
「二度とも私が直接指揮した訳ではありませんので。特に前回は敵側組織に潜らせたネズミにやらせたこと、ジークフリートの目を欺きながらではまともな動きも取れなかったことでしょう。今までのことはほんの小手調べに過ぎません」
　『パンドラ』は弦をつま弾く手を止めた。ハープを置き、つと立ち上がる。容貌だけでなく、その肢体もまた美しく整っていることがシルクのローブの上からでも見てとれた。『パンドラ』はゆっくりとミーノスの方へ歩み寄ると、その赤い唇を耳元に寄せて言った。
「……では行って来るがいい。そして今度こそ、カミュの『力』を掴んで来るのだ。……私を抱きたければ。」
「……御意に。」
　ミーノスが、再び唇だけで笑った。

「ミロ、今から少し時間取れないかな」
　白樺の木々を配した庭園の、大理石で作られた噴水の縁に

腰かけて、カミュは遠慮がちにそう言った。ここからは、ミロ達のひとつ上の学年である第十学年のホームクラスが良く見える。
「時間って・・どうして？」
「実はね、フロイア先輩に君の話をしたら、是非とも一度会ってみたいって言うんだ。それで、もし時間があれば訪ねて行こうかと思って」
「ああ、カミュの――――――」
幼なじみ。ミロは一週間程前遠くから見かけただけの長身の青年を思い出した。優しそうな容貌をした、亜麻色の髪の好青年。
「そっか……俺もぜひ会ってみたいけど、実は今日は駄目なんだ」
「え？」
「俺……アルバイトすることにしたんだ」
隠していた後ろめたさから、少し口ごもりながら白状する。
「アルバイト？　どこで？」
「ここの管理棟の掃除。でないと時間がないからさ」
何でもないと言うように、にっこりとミロが笑った。カミュは思わずその紅の瞳に、気づかわしげな色を浮かべた。何故ミロがそんなことを言い出したのか。その原因を知っていたからだ。
「ミロ……気にしてるのか？　ジュリアンの言葉……」
先日の小事件を思い出し、表情を曇らせる。同じクラスでヴァイオリンパートに所属しているジュリアン・ソロの、少し鼻にかけたような声が耳に蘇る。
『君、まだ団費も強化練合宿費も払ってないんだって？』
『ああ……うん。今どうしても都合がつかないから奨学金が下りるまで少し待ってもらうことにして……』
『あの程度の金額が？　先が思い遣られるね。オーケストラはお金がかかるよ。止めといた方がいいんじゃないか？』
明らかに、敵意のある口調だった。ジュリアンは、サガとシュラに気に入られているミロが気に食わないのだ。
彼が中等部にいた頃は、誰もが彼に注目していた。成績はいつもトップクラスだったし、ヴァイオリンも弾ける。沢山の役員をこなしてもいた。
それが、高等部へ上がった途端にミロとカミュの二人に圧されてしまった。学年代表のカミュは仕方がないと思う。世

界に二人といない突然変異と言えば興味が湧くのは当然であるし、その花のような美貌に憧れる気持ちは分からなくもない。だが、自分と大して変わらないミロがどうしてあれほど注目されるのか。

悔し紛れに冷ややかな視線を投げつけておいて、ジュリアンは止めの一言を刺した。

『君なら踏み倒しても怒られないだろうけどね。まあ、僕ら会計係に言わせてもらえれば、まともに団費も払えないような人間はここに来るべきじゃないよ。いい迷惑だ』

ミロは、何も言わなかった。怒ったのは、むしろカミュの方だった。その後、何を言い争ったかまでは覚えていない。だが、ジュリアンは自分達が納めている学費から出る奨学金を団費に回すとは何事だと責めたのだ。

「気にしちゃいないよ。あいつが自分で働いた金で団費を納めてるっていうなら話は別だけどね。でも、自由になる資金が少ないのは本当だ。何とか対策を立てようと思っていたら学長がこの話を持ってきてくれたのさ」

「それならいいけど……」

まだ少し心配そうなカミュに、ミロが少し冗談めかして笑う。

「それに、このままだと折角秋合宿に行ってもカミュと遊びに行くことも出来ないだろ？」

秋合宿。二人にとっては、ともに行く初の旅行になる。希望地は、第一希望にストックホルム、第二希望以下にフィレンツェ、ロンドンだった。

人気候補地を選ばなかったのは、抽選にかかってばらばらの候補地に飛ばされない為だ。

「それはそうだ」

カミュも、思わず口元をほころばせた。ミロと共に行けることも、そこで自由な研究が出来ることも、カミュにはとても楽しみだったのだ。

六時限終了の鐘が鳴った。ミロはいけね、と小さく口の中で呟くと袖をたくし上げて腕時計を見た。針は四時二十分を指している。アルバイトの時間まであと十分しかない。

「ごめん、もう時間だ。俺、バイトに行くから。先輩によろしく言っといて。またお会い出来る機会を楽しみにしていますって。」

「うん。伝えておくよ。……仕事頑張って」

ミロに続いて腰を上げる。まだ部活動が始まるまでには時間があるが、フロイアに会ってから行けば個人練習をするには丁度良い。
「カミュ」
駆け出しかけたミロが、言い忘れたかのようにふと立ち止まった。
「・・あの時、俺の代わりに怒ってくれて有り難う。すごく嬉しかった」
振り返ったミロの笑顔は、このアルテンベルクで二人が再会した時と同じ輝きに満ちていた。カミュはその笑顔を瞳の奥にしまって、ゆっくりと教室にむけて歩き出した。ミロがああいう表情をしてくれるなら、嫌いな喧嘩をしたことも報われる。
「済みません。フロイア・クリスタル先輩はいらっしゃいますか?」
「フロイア? ああ、あいつ神学の自由課題レポート出すって教官室に行ったよ。何せ相手が相手だから、なかなか帰ってこないんじゃないか?」
「そうですか……では後日また参ります。有り難うございました」
カミュはあっさりとその場を辞して、再び歩き出した。ならば、また後日に機会を設けよう。
その時、確かにカミュは油断していた。空想に耽るあまり、ここ二週間に自分の身に降りかかった危険を忘れてしまったのだ。授業がひけて人気のなくなった庭園を、足音を忍ばせて横切る影がある。影はゆっくりと赤毛の少年に忍び寄ると、いきなり後ろからとびかかって少年の身体を羽交い絞めにした。同時に、顔に白いガーゼを押しつける。
「な、何を……!」
きついクロロホルムの匂いが、カミュの全身から急速に力を奪っていく。
カミュは助けを呼ぶことも出来ず、暗い意識の底へと沈んでいった。

フロイアは、自由研究のレポートをやっと教官に提出し終えてホームクラスに戻ってきた。聖書の解釈についてまとめ

たのだが、問答好きな先生に捕まって帰れなくなってしまったのだ。
クラスには、既に人影はない。フロイアはノート類をまとめると窓を閉めて教室を出ようとした。窓に手をかけ、ふと庭園の奥を見やる。そこに想像もしなかった光景を見て、フロイアはその場に凍りついた。
――……カミュ！――――
見間違えよう筈もない。緋色の髪をした少年が、ぐったりと意識を失って大柄な青年に連れ去られるところだったのだ。
「カミュ！」
ノートを机の上に放り出し、非常口から外に飛び出す。青年は林の中に入ったようだった。フロイアの面から血の気が引いていく。
とにかく、見失わないようにしなければ。固く両手を握り締め、フロイアは林に向かって全速力で駆け出した。
「……そんなに、憎いんですか」
カミュは、自分を取り囲んでいるいくつもの人影を睨み据えながら、低い声で言った。両腕は荒縄で縛り上げられて、木の幹に繋がれている。
今度ばかりは抗戦して逃げるという訳にはいかなかった。こんな林の奥では、誰かが通りかかる可能性もほとんどない。
気絶させられて次に気付いた時には、この林の奥にいた。見覚えのある顔がいくつかある。だがそれよりもはっきりと物語っているのは、胸元に光る白い星の徽章だった。学生組織『白い星』。数日前、カミュを呼び出した集団だ。
「こんな手を使ってまで――――！」
「黙れ！　お前はグリース様を侮辱し、手を上げた。少し先輩に対する礼儀を教えてやる必要がある」
左頬に大きな傷のある一人が、カミュの襟元を引き掴んで顔を近づける。カミュはその傷の凄まじさに目を見張った。目が潰れていないのが不思議なくらいだ。
「お前の信じるキリスト教には、『上級者には死体の如く従順であれ』という規律があるそうだな」
ふと唇の端を上げて、男が笑った。

「……それはジュスイット教団の教えです。私には関係ない。それに上級者とは、宗教上の先輩のことでしょう」
「だったら改心するんだな。ここでは先輩の命令は絶対だ。お前がグリース様を拒めなくなるよう、よくよく仕込んでやるから有難く思え」
　辺りを取り巻いていた気配がじわじわと変化する。いきなり、カミュの胸のボタンが飛んだ。男が、胸元から裾にかけて一気に引き裂いたのだ。
「何をする！」
　カミュの顔色が変わる。
「うるさいな。黙らせろ」
　頭の側にいた一人に、男は指示を出した。命令を受けた黒髪の青年は、カミュの髪を引き掴むと開いた唇の間から舌を割り込ませた。喉深くまで深く押し込まれて、抗おうにも息が出来ない。
「う……っ！」
　呻いたはしから、戦慄めいたおののきが全身を走り抜ける。
「そう……おとなしくしてな」
　男は、満足げに頷くとシャツの下の白い胸に舌を這わせた。桜色に色づいた突起を嬲るように嘗め回す。カミュの縛られた腕に力が入り、木の幹と縄とが擦れてきりきりと鳴った。
「……！」
　唇を塞がれたカミュには、自分が今何をされているのかを見ることは出来なかった。だがそれ故に、危機を感じ取った肌の神経は著しく敏感さを増した。抗おうと身を捩る程与えられる刺激は強くなる。カミュは無意識のうちに瞼を合わせていた。掠れた呻きが、大きくそり返った喉を突く。
「どうだ？」
「大分力が抜けてきたな」
「もうそろそろいいだろう。離してやれ」
　勝ち誇ったような声が、朦朧とした意識に飛び込んでくる。やっと唇を解放され、跳ね上がった息が熱を帯びて喉を震わせた。カミュには、全身を襲う冷たいの浮遊感の正体が判らない。きつく吸われる度身体を走り抜けるしびれるようなおののきと、下肢に絡みつく手の例えようもない程のおぞましさとが、全く別の感覚であることに気付かないのだ。
　こんな自分は許せない。辱められるくらいなら舌を噛んでやる。

眩暈を起こす程の嫌悪感に、平静を失った頭で考えた時だった。
「何をしているのです！」
突如、凛然とした声が木々の間にこだました。ぎょっとしたように、男達が一斉に振り返る。それからしばらく侵入者を眺めると、彼等は急に声を上げて笑いだした。
無理もない。彼等の行為を邪魔した侵入者は、争いごとには縁遠い容貌をしたひとつ下の下級生だったのだ。
「すぐに放して下さい！　あなた方にはそれがどういう行為か、判っている筈だ！」
「お前、第十学年のフロイア・クリスタルだな？」
揶揄するような声が返って来る。気立てが優しく、真面目で大人しいフロイアは、良い意味で全校に名を知られる存在だった。
「気取ってないでこいつを見てみろよ。なかなか煽情的だぜ？」
「止めるんです！　あなた方はカミュを殺すつもりですか　その子はそんな辱めを受けたら自害しかねない。あなたがたの感覚と、我々の倫理観念とは違うんだ！」
フロイアは、常の彼に似合わず叫んでいた。何よりも、今はカミュの自害が危ない。早まった考えは思い止まらせようと男達にかけ寄り、彼はその生々しい光景に愕然とした。
「フロ…イア……」
引き裂かれた服、血の滲んだような愛咬の痕、そして何よりも、冷静な輝きを失った紅の瞳。一目で判る、通常の精神を剥ぎ取られたカミュの熱に浮かされたような表情。
――カ・・ミュ……？――――
また強烈に、フロイアの精神を何かが駆け抜けた。あの時神学のクラスで感じたのと同じ、全身が指先から痺れていくような戦慄。やがて全ての感覚は意識の外に追いやられ、感じられるのは見つめる対象の姿態や仕草、ささやくような声や吐息だけになる。
――どういうことだ？　私はまさか……！――――
「どうしたんだ？　勢いこんできた割には元気がないじゃないか」
先程の、頬に傷のある男が含み笑いをしながら言った。仲間に目くばせしてフロイアを取り囲ませる。これで、もう逃げられる心配はない。

「……放せ……」
「何だと？」
「すぐに放せ！」
　フロイアは目の前の青年を突き飛ばした。ポケットに忍ばせていたナイフで縄を切り、カミュを助け起こす。カミュは我に返ったように、夢中でフロイアにしがみついてきた。小刻みに震えるカミュの身体を抱き締めて、フロイアが男たちを睨み据える。
「酷いことを……もう一歩遅かったら、カミュは舌を噛んでいた！」
「そんなこと出来るもんか。事実、そいつは俺達を感じてたんだからな。神学者の息子が聞いて呆れる。ほんの少し、からかってやっただけで動けなくなっちまった。恐ろしく敏感な肌の持ち主だぜ？　そいつは」
「やめろ！」
　殺気じみた怒りを漂わせて、フロイアは短く言い放った。カミュには聞かせたくない。自分も聞きたくない。
――何故なら……！――
　少し外れたところで、一部始終をただじっと眺めているだけの人影があった。淡い金髪と、灰色の瞳。冷めた瞳で事態を眺めていたその男は急につかつかと歩み寄ると、唇だけで笑って二人を見下ろした。
　何故か人をぞっとさせる、無機質な笑い。
「邪魔が入った。仕方ありませんね。今日は引き上げましょう。フロイア・クリスタル、貴方には邪魔をした代償に一役買ってもらいます。バレンタイン、例の物を」
　バレンタインと呼ばれた青年が、かしこまって小さなケースを差し出す。
　金髪の男はそれを黙って受け取ると、ふたを開けて小さな注射器を取り出した。
「やれ」
　短い号令と共に、青年たちが一斉に二人に襲いかかる。激しくもみ合ううちにみぞおちに深い一撃を食らって、フロイアは意識を混濁させた。
「面白い事になった。当初の計画よりいい結果が出るかも知れませんね」
　意識を失ったフロイアの袖をたくし上げ、無色の液体を流し込む。男は初めて、愉しそうに笑った。フロイアの身体に

打ち込まれたもの。それは本当はカミュに対して使われる筈だった幻覚剤だった。

「六時から合奏を始める。それまでに準備をしておくように」
サガは一言そう告げて、練習室の中を見渡した。今日はミロとカミュの姿が見えない。ミロはバイトで遅れると聞いたが、カミュまでいないのはどういうことか。
――まさか二人で仲良くサボタージュか……？――――
やって来たら、問いただしてみなくては。そんなことを考えつつ、ヴァイオリンを取り上げた時だった。
「カミュ！どうしたんだ！」
突然、入口近くで声が上がった。シュラの声だ。
「シュラ　何かあったのか！」
とっさにアマティを置き、入口に駆けつける。ドアの向こうにいたのは、土と草露に汚れたシャツを左手で合わせ、張りつめた神経でその場に立っているといった態のカミュ。
「カミュ！一体何が――――！」
「……フロイアが……」
「フロイア　」
「助けて下さい……！　フロイア先輩が私刑に遭って……！」
とっさに、シュラと顔を見合わせる。こんな時には、言葉は要らない。
「判った、すぐに行く。案内出来るな？」
カミュが深く頷く。
シュラとサガは、席を外す旨を伝えると弾かれたように練習所を飛び出した。目の前を、明るい金髪が横切る。その金髪の少年は、乱れたカミュの姿を見るなり凍りついたようにその場に立ち止まった。
「カミュ……！」
少年の視界が一瞬暗転する。
「ミロ！　今は時間がない！　後で詳しく話すから！」
「待てよ、カミュ！」
ミロはカミュの隣に駆け寄った。練習は後回しだ。
「俺も行く！」
時々、思い出したように唇を噛み締めるカミュの横顔を見

つめ、何があったのかを悟る。目に見えない敵の姿と、カミュを守り切れなかった自分とに腹を立てて、ミロはぎりっと歯を食い縛った。

フロイアは、保健室に運び込まれた。全身の打撲傷と僅かな裂傷の他には目立った傷は見られなかったが、かなり手ひどくやられたことは確かだった。カミュはフロイアの看病を買って出て、ベッドの枕元にいすを運び腰を下ろした。隣にはミロが控えている。

「……フロイアは、私をかばったんだ」

苦しげなカミュの声が、そう打ち明けた。

「私は縛りつけられていて、身動きが出来なかった。屈辱に理性も何も吹き飛んでしまって、こんな思いをするなら死んでしまえと思った。そうしたら、フロイアが飛び込んできたんだ。私を助け出す為ではなく、私の早まった行動を止めるために。」

助け出すのなら、あのままこっそりと去って人を連れてきた方がよほど有効な筈だった。だがカミュの性格を知り抜いているフロイアは、それまではカミュの精神が持たないと思ったのだ。今すぐに止めさせなければ、カミュは舌を噛む。フロイアは自分が盾になってカミュを守るつもりで、敵陣に飛び込んだのだった。

「私が・・こんな目に遭わせた。これからも付け狙われるかも知れない。誰の恨みを買う人でもなかったのに！」

「カミュ……」

ミロは痛々しげな瞳でカミュを見た。自分のせいで人が傷つくことの痛みを、ミロも知らない訳ではない。何よりも、もしカミュが自分の為にこんなことになったら、ミロは自分を決して許さないだろう。

「……だったら、守ろう」

眠るフロイアの青い顔を見つめて、ミロは言った。

「後悔しても、何にもならない。もう遅い。だから、全力で守るんだ。彼が二度とこんな目に遭わないように」

ひざの上で握り締めた拳に、力がこもる。紡いだ声は、自分でもびっくりする程落ち着いていた。守り切れるかどうかなんて、判らない。でも、守り切らなければ、カミュの精神

が壊れてしまう。
　カミュの、意外な面での線の細さを、ミロは軟弱だとは思わなかった。人を傷つけることに対して繊細過ぎる程臆病なのは、自分の業を認めているからだ。自分を排斥する者たちを受け入れて、何とかそれを乗り越える術を身につける。そうなって初めて、その業の為に傷ついた人を思い遣ってやれるのだ。
　カミュは、意外なところで自分と似ている。ミロはそう思った。
「守る……？」
「ああ。だって、それしかないだろ？」
　カミュの、びっくりしたような声が返って来る。
「私たちで？」
「そう。足りなければ先輩たちにも手伝ってもらって」
　カミュは阿気にとられたようにしばらくミロの顔を見つめた。・・全く、何故彼はこうも前向きなのだろう。
「君って人は……」
「なに？」
　ミロがカミュの顔を覗き込む。返ってきた微笑みは、安堵の色に満ちていて柔らかかった。
「心が強い。どうやったら私は君に追いつける？」
　ほっとした拍子に、全身の緊張が弛む。つと目頭が熱くなって、カミュは少し面を伏せた。
「……君に追いつきたくて、ここまでやって来た。バイオをやりたいと思ったのも、遺伝の仕組みを研究することで自分に与えられた運命を乗り越えたいと思ったからなんだ」
――え？――――
　ミロは内心の驚きを押し隠してカミュの言葉に耳を傾けた。カミュが自分の姿を苦にしている様を見せたのは、これが初めてだったからだ。
「もう随分昔から、この姿のことは諦めてる。確かに血の色のようだし、それで悪魔と噂されても人々に罪はないと思う。だから私は彼等を憎むのは止めようと努力してきたし、出来るなら友達になりたいと思っていた」
カミュはそこで少し苦しげに息をついた。
「そう……君が言った通り、諦めては駄目なのに……どうしても駄目なんだ！　身体を汚されるのだけは！　憎んだってどうにもならないのに、こんな目にあう度に憎んでしまう。憎

んで、かっとなって、何をするかも判らない。何故私なんだって、自分は女の子の代わりじゃないって……！」

「カミュ！」

ミロはたまらなくなってカミュの頭を抱き寄せた。カミュは、聖人じゃない。神学者の息子とは言え彼もまた生身の人間なのだ。笑顔の影に痛みが隠されていることもあった筈だった。

それなのに、カミュは更に微笑もうとする。誰にも痛みを気付かせないほどの、天上の光をまとって。

「そんなに……思いつめるなよ。」

許せない。ミロはそう思った。こんなにも、血を流しながらでも優しくあろうとするカミュを、どうして好んで痛めつけようとするのか。

「……俺は、カミュみたいにカトリックの教えを受けた訳じゃないからカミュの気持ちは分からない。でも、守ることは出来るよ。そんなふうに苦しい時に、それ以上の傷を増やさないように、ほんの少しだけ力を貸すことは出来る。君が元通り元気になるまでのつかの間の間だけ……。だから――」

カミュの身体に腕を回したまま天井を仰いで、一人で思いつめるな、とミロは囁いた。仰向いた瞳から涙が溢れそうになる。カミュを守りたい。優し過ぎる心が流す血が止まるまで、誰にも触れさせないように包み込んでしまいたい。

本当は、一生自分だけのものにしてしまいたかった。いつも側にいて、抱き締めていたかった。ミロにカミュだけしか見えないように、カミュも自分だけを必要としてくれたら。だが一方で、カミュをそんな寂しい存在にしてしまうのには抵抗があった。長い間友達を持たなかったミロには、カミュの持つ友人たちが輝かしい存在に思えたのだ。

「何があっても、君を傷つけたりしない。だから安心して――」

自分は、カミュには触れない。自らの胸を深く切り裂きながら、ミロは誓いの言葉を声にした。

四

『フロイア！　フロイア！　早くおいで！』

そこは、かつて彼がカミュと共に過ごしたサン・モリッツのフロベール邸だった。大理石の階段の上で、カミュが笑っている。だが、それは九才のカミュではなかった。背中まで伸びた赤い髪を風に靡かせて、あの頃よりもほっそりとした面と赤い唇を持った十四才のカミュ。

フロイアは身体の奥で何かが震え出すのを感じながら、カミュにゆっくりと近づいた。澄んだ紅の瞳が、不思議そうな形に見開かれる。

『フロイア？　どうしたんだ？　そんな怖い顔して――――』

フロイアは何かに憑かれたようにカミュの肩を掴んだ。そのまま、唇に唇を重ねる。カミュの身体が、びくんと震えた。

『フロイア！　気でも狂ったのか？　放し――――――！』

フロイアは、最後まで言わせなかった。貪るように舌を絡め、そのままカミュの身体を階段の上に押し倒す。カミュが、フロイアの背中に爪を立てた。

『何をする！　止め……！』

『カミュ！』

刺すような非難の眼差しが、フロイアの手の動きに拍車をかけた。狂ったように衣服を剥ぎ取り、現れた肌に舌を這わせる。カミュを辱める行為だと判っていても、全身を焦がす衝動は止められなかった。抗う手首を関節が白む程強く押えつけ、怒りにわななく膝を割る。指がからかうようにカミュの中心にまとわりつき、まるでカミュを怒らせようとしているかのように唇がその後を追った。

『あ……うっ……！』

噛み殺していた声が唇から漏れたのは、かつてない痛みがカミュの全身を襲ったからだ。

『カミュ……！』

悲鳴を上げるカミュの身体を、フロイアは容赦なく刺し貫いた。カミュの瞳に狂気の色が閃く。はぎ取られた衣服のポ

ケットから短剣を掴み出し、フロイアの胸に突き立てる。
『うっ……』
フロイアの意識は、そこでぷっつりと途切れた。

「……何だ……？　今のは……」
フロイアは鉛のような頭を上げた。全身が汗にまみれている。辺りを見渡すと、そこはサン・モリッツではなくアルテンベルクの保健室だった。
「あら、目が覚めたのね？　良かったわ」
大人の女性の声がして、静かにカーテンが開かれる。保健の先生だ。
「ずっと起きないから……心配していたのよ」
「あの……一体何が……」
「……覚えていないのね」
彼女は絞ったタオルを刺し出しながら、溜め息をついた。
「ひどい目にあわされたのよ。全身打撲傷・裂傷・擦り傷。どう？　頭は何でもない？」
「え……ええ」
ぞくっとした恐怖が一瞬フロイアを襲った。さっきの夢は……正気か？
「カミュ・フロベールがついさっきまでここにいたんだけど。授業があるからまた放課後に来るって言っていたわ。彼もすごく心配していて……繰り返し自分のせいだって嘆いていたわ」
カミュ・フロベール。その名前を聞くだけで、胸がきりきりと痛む。
「……有り難うございました」
まるで自分のものではないような声で、フロイアは小さく呟いた。

「フロイア先輩！　もう大丈夫なんですか 」
頭に包帯を巻いた長身を見るなり、カミュは声を上げて駆け寄った。少し足を引きずっている。制服を着てはいるが、その下は傷だらけなのに違いない。

「何でもありませんよ。このくらいは。」
「本当に済みません……私が油断したばっかりに……」
「カミュ、それは言わないことにしましょう。御互い様だ」
フロイアは悪夢の残滓を理性で消し去り、柔らかく微笑んだ。だが、胸を締めつける苦しさは一向に軽くはならなかった。
夢の中の自分の行為への後ろめたさが、消えない。
「貴方が、ミロですね？」
ふと斜め後ろに佇んでいる少年に気付き、気を逸らすために声をかけた。光り輝く黄金の髪と、宝石のような深い青の瞳。カミュの言葉そのものの、想像していたよりも数倍も美しい少年。
「はい。始めまして。先輩の話はカミュから聞きました。本当はあの日お訪ねするつもりだったんですが……こんなことになってしまって」
ミロは少し瞳を伏せて呟いた。あの時、自分が断わらずに会っていれば、こんなことにはならなかったかも知れないのだ。
「そうですね。護身術の心得はあるつもりなんですが。今度はやられないようにします」
フロイアはにっこりと笑った。この少年は、何故か心を明るくしてくれる。
ミロは、心が温まるのを感じた。生徒総監のシオンといい、このフロイアと言い、カミュの友人は何と穏やかな人達ばかりなのだろう。
ほんの少し、胸が痛んだ。それは、寂しさという名の感傷だった。
「先輩、申し訳ありません。これから授業があるのでもう行かなくてはならないんですが……」
「ああ、私に構わないで行って下さい。私はこれから少し礼拝堂に行こうと思うので……」
二人は顔を見合わせた。とりあえず礼拝堂なら、危険なことはあるまい。
だがカミュは忠告を伝えようと思った。相手は『白い星』のメンバーだ。いつしかけて来るか判らない。
「先輩、白い星の徽章を胸につけた集団に気をつけて下さい。私は……彼等の命に従わなかったので制裁されたんです」
「白い星……？」

記憶の糸を辿ってみる。確かに、あの場にいた人間は全て白い星を胸につけていた。

――しかし確か、『白い星』は……――――

「……判りました。気をつけます」

とりあえずそう安心させて、フロイアはカミュを見つめた。息苦しさが胸を突く。軽い眩暈を覚えた。

腕時計を気にしながら、二人の少年が走り去って行く。フロイアは途端に激しく鳴り始めた胸の鼓動に、唇をかみしめた。

「ミロ！遅れてるぞ！」

練習室に、厳しい声が響く。

「そこは大事な聞かせどころなんだ。早いパッセージは無理でも、こういうところはきちんと吹く！」

「済みません！」

鬼トレーナーで有名なシュラのしごきの甲斐あってか、ミロはかなり吹けるようになっていた。冬の定期演奏会には舞台に乗ることになってしまったので、ぐずぐすしてはいられない。

練習室のもう一方の端では、弦楽器が分奏をしていた。カミュの姿も見える。カミュも初心者だったが、ヴィオラは全音符のトレモロが多いので合奏に加わっているのだった。

「もう一回やり直し！」

息をいっぱいに吸い込んで、ホルン八本によるフォルテシモのコラールをさらう。複合三重カデンツ。ミロは、今度はシュラのセカンドに合わせることが出来た。

「よし。休憩だ」

「やったぁ！」

「唇痛い……」

途端に、やっと解放されたメンバーの安堵の声があたりを満たす。

ミロは緊張して凝ってしまった肩を軽く叩くと、楽器を置いて大きく溜め息をついた。第一楽章の弦の主題が聞こえて来る。吸い寄せられるようにその姿を眺めていると、少しからかい気味のシュラの声が降ってきた。

「おいおい、ただの友人をそんな目で見るもんじゃないぜ？」

「えっ？　そ、そんな……」
「さっきからカミュばっかり見てるだろう、お前。ミスはするわ、リズムは狂うわ……音程だけは狂わないのは大したもんだがな」
「ちっ……違います！　ちょっとぼうっとしてただけで……！」
「焦るところが怪しい」
　ミロは半ばパニックを起こしかけながら自問した。カミュばかり見てた？　自分でも気付かないうちに……？
「まあ、そう隠すな。こんな男ばっかりの学校じゃ別に珍しいことでもないさ。女子部があるってったって、校舎の場所は違うし普段は交流出来ない。あいつ程の『美人』なら引っ張りだこなんじゃないか？　お前だって十分危ないが……」
「先輩！　その言葉、カミュの前で言うのだけは絶対にやめて下さい！」
　思わず、ミロはシュラに詰め寄っていた。大声を出したいのを必死でこらえて。
「ミロ……？」
「カミュは……厳格なカトリックの信者なんだ。彼はそんなふうに見られる自分を許せないんです。この間も先輩の前では落ち着いていたけど、本当はひどく傷ついていた」
　真剣なミロの調子に、シュラは思わず真面目な顔になった。あんなにしっかりして見えたカミュが……実は傷ついていた？
「……そうか。悪かった。俺は誉めたつもりだったんだがな。確かに言われる方には嬉しくないかも知れない」
　彼にとっては、優秀で素直な二人は可愛い後輩だった。だからこそからかいたくもなるわけだが、その冗談が通じない程の傷となれば少々考えない訳には行くまい。
　ミロは沈黙してしまったシュラを眺めながら自問した。おそらく、シュラの考え方の方が一般的だろう。カミュは確かにきれいだ。きれいなものをきれいと言うのに、人々は何の罪も感じないに違いない。
　だが、カミュにとってはそれは大罪を意味する。少々今は過敏になっているとしても、本質的に人の心を惑わすものは『罪』なのだから。
――それじゃ、俺は？　俺はカミュのことをどう思っているんだ？――――

ふとその疑問に行き当たって、ミロは愕然とした。大切な友人。ミロが初めて手に入れた、心休められる存在。何があっても守り抜いて、出来るならずっとそばにいたい人――

『ただの友人を、そんな目で見るもんじゃないぜ？』

先刻のシュラの言葉が耳に蘇る。ミロは雷に打たれたように、その言葉の意味を反芻した。俺はまさか……

「休憩は終わりだ。次、四楽章をさらう」

シュラの『鬼トレーナー』に戻った声が告げる。

――俺は……カミュが大切なだけだ。初めて俺を暖かく迎えてくれた人だから、守りたいと思うだけだ――――

楽器を構え、そう自分の胸に言い聞かせる。これは違う。これは……恋じゃない。

その日の練習は、目茶苦茶だった。ミロは罰として、シュラから第一楽章のコラールを今日中に百回さらうことを申し渡された。

辺りが暗くなっていることに気付いたのは、すっかり身体が冷えきってしまってからだった。フロイアは、きしむ身体を無理やり動かして跪いていた足を伸ばした。明かりのない礼拝堂には、彼の他には誰もいない。小さく溜め息をつき、フロイアは徐に礼拝堂を出ようとした。

「随分長い懺悔でしたね」

ゴシック調の装飾を施された入口を出ようとした時だった。不意に、聞き覚えのある声がフロイアを引き止めた。

「あ・・貴方は……！」

「どんな夢を見ましたか？」

忘れよう筈もない。そこに立っていたのは、あの時自分を見下ろしていた灰色の瞳の青年だったのだ。

「どういうつもりです……！」

「貴方に打ち込んだ薬の成果を聞きたかったのです。すばらしい夢を見たでしょう？」

フロイアは青年の瞳を睨み付けたまま、握り締めた拳をわななかせた。

では、あれは薬の見せた妄想だったと言うのか。

「あれは幻覚剤です。自分の心に潜んでいる恐怖や欲望を、引きずり出して視覚化する。貴方は見た筈だ。カミュ・フロベー

ルを無理やりに押し倒し、辱め、我々がやったように犯した自分を。」
「何ということを……場所をわきまえなさい！　ここは礼拝堂です！」
　思わず、フロイアは叫んだ。だが、その言葉は灰色の瞳の男の言葉を肯定したに過ぎなかった。
「……あれが貴方の本心なのですよ。私には直に判った。貴方はカミュを抱きたいと思っている。だがそれは貴方のせいではない。カミュの赤い瞳のせいだ」
　囁くような男の声が、嫌応なしに耳に滑り込んで来る。フロイアは激しく首を振った。
「違う！」
「彼の遺伝上の秘密を知っていますか？　赤い髪と瞳は恐るべき力の印。貴方はあの瞳に惑わされているのですよ」
　澱みなく紡がれる声は高くもなく低くもなく、拒もうにも意志の力を抜き取ってしまうかのような強さを備えていた。フロイアは、頭の中に霞がかかっていくのを感じた。頭の神経が、端の方から徐々に痺れていくような気がする。
「もう判ったでしょう……貴方が苦しむことはないのです。さあ、彼のもとへ行き、自分を解放なさい。……これをあげましょう。いざという時に、貴方を守ってくれる」
　俯いてしまったフロイアを見下ろし、男が満足げに笑う。昨日の幻覚剤がまだ少し残っているらしい。思ったよりも簡単に暗示にかかってくれる。
　フロイアは、焦点の会わない瞳を男に向けた。男が、ポケットから光る物を取り出す。
　それは、良く磨き抜かれた一振りの短剣だった。

「は――――……あと十回……」
　ミロは痛む唇をさすりながら溜め息をついた。隣で、カミュがくすくすと笑っている。
「真面目だな、ミロ。本当に百回やるなんて」
「今日のは確かに俺が悪い。しょうがないよ」
　外はもう真っ暗だ。団員も、みんな練習を終えて帰ってしまっている。
　ミロは楽器を構え直した。楽器を支える左手の小指が、擦

れて赤くなっていた。
「私も合わせるよ」
カミュがヴィオラを構える。
ヴァイオリンより少し大きめのヴィオラは、カミュの華奢な顎で支えるには少し重たそうだった。肩当てを使えば楽になるのだが、響きが濁ることを嫌ったカミュは布を当てただけで構えているのだ。それだけで十分絵になる姿を見ながら、ミロは誰がこういった奏法を考えたのだろうと思った。少し小首を傾げて弓を構える姿は、本当に例えようもなく美しい。
「どうしたんだ？ぼんやりして。そんなふうだからシュラ先輩に怒られたんだろう？」
注意するカミュの瞳が笑っている。
「う、うん。ごめん」
ミロはどきっとした。こんなふうに微笑まれると、胸が高鳴る自分をミロは知っている。
「じゃあ四十五小節目の頭から」
ハイ・ポジションのトレモロと金管コラール。全員がそろわないと、矢張り間が抜けておかしい。二人は声を立てて笑った。カミュが笑いながら糸巻きに手をかける。
「音が合っていなかったね。合わせるから、Ａの音をくれるかな」
ミロは実音のラの音を出した。カミュが弓を滑らせながら左手で糸巻きを閉める。と、途端にバシッという音がして弦が切れた。
「……つっ！」
「カミュ　」
「……大丈夫。かすっただけ」
カミュは片目をつぶったまま答えた。切れた弦がはねて、したたかに左頬を打ったのだ。
「血が出てるよ！目は　」
焦ったミロの声が、練習室に響く。

フロイアは入口に近い窓から、ただひとつ明かりがついている練習室の中を眺めていた。慌てふためいたミロがティッシュを取り出し、カミュの頬を押さえている。血は、なかなか止まらないようだった。カミュは元々血が薄いのだ。
――駄目だ。あんな血液を吸い取るものを当てても――――

しばらくは、触らずに放っておいた方がいい。中へ入ってそう二人に教えてやろうとした時だった。

――……ミロ?!――

ミロが、傷口をなめたのだ。おそるおそる、まるで宝物に触れるように。

急に、視界が真っ暗になったような気がした。フロイアはよろめく身体を辛うじて支えて、戸口に手をかけた。ドアがきしむ音が響く。部屋の中の二人はぎくっとして同時に戸口を振り返った。

「誰だっ！」

立っていたのは、少し青い顔のフロイア。

「フロイア……！　びっくりした。貴方だったんですか」

カミュがほっと安堵の息をついた。ここへ来て三度も狙われているため、少し過敏になっていたのだ。

「こんなに遅くまで……練習ですか？」

「ええ。実は先輩に怒られて宿題出されたんです」

「それにしても……もうすぐ九時になりますよ？」

「九時?!」

慌てて腕時計を見る。八時五十分。九時の門限まであと十分だ。

「やばい！　寮に連絡してこなきゃ！　……カミュ、俺電話かけて来るからここで待ってて！」

連絡が遅れたら、今日はここで泊まりになる。ミロはもう一度後ろを振り返ると、慌てて夜の林に駆け出していった。

ミロのいなくなった部屋は、何かしら闇を制する輝きを失ったような気がした。フロイアは引き寄せられるように練習室に足を踏み入れると、ゆっくりとした足取りでカミュの方へ歩み寄った。

「本当に……変わった」

いすに腰かけたままのカミュを見下ろして、低く呟く。

「君はいつもあんなに遠い瞳をしていたのに……今はすぐ傍にいる。この私のいる、下々の世界に。」

「フロイア……？」

カミュは弦の切れたヴィオラをケースに置き、立ち上がって旧友を見つめた。どこか、今の彼はいつもと雰囲気が違う。

「ずっとそばに行きたいと思っていた。君と同じ高みにまで

上って行きたいと。でも君は、私などが到底行ける筈もない天上人の瞳をして、微笑みながら私を見下ろしていた――――」
「フロイア？　どうしたんです？」
カミュの声に不安が混じる。落ち着かないカミュの瞳にふと微笑むと、フロイアはゆっくりと手を伸ばしてカミュの左頬の傷を優しく撫でた。
「どうして私が修道士を目指したのか、判りますか？　君に追いつきたかったからだ。君が天上の光を纏うなら、その世界に仕える人間になりたかった。君は私の信仰の対象でさえあったんです……」
「フロイア！……いけない！　そんなことを口にしては！」
カミュは強い不安を感じて、フロイアの両腕を掴んでその身体を揺さぶった。
フロイアはそのカミュの行為に触発されたように、強い力でカミュの肩を掴んだ。いつも澄んだ輝きを宿していた薄青の瞳が、今は熱っぽく潤んでいた。
「でも、今の君は違う……！　そんなに温かな瞳をして……この世界に、私の手の届くところにいるんだ！」
渾身の力を込めてカミュを抱き締める。カミュは驚いて抗おうとした。だが、傷を負っている筈のフロイアの腕は頑として緩まなかった。無理もない。カミュに護身術を教えたのはフロイアだったのだ。
「フロイア……！　目を覚ませ……！」
フロイアの唇が、カミュの白い首筋を吸い上げる。哀願するような声で、カミュは叫んだ。信じたくなかったのだ。あの清廉なフロイアが、こんな神の道に外れた行為をするなど。
「カミュ！　愛してる……愛しているんだ！」
「フロイア！　・・放し……っ！」
言いかけた唇を、フロイアの唇が塞ぐ。口づけは、狂おしい程の情念を纏っていてカミュを混乱させた。女の代わりにされた訳ではないことはカミュにも判る。だが、これは罪だ。
冷たい手が、外されたボタンの間から滑り込んで来る。かつて林の中で味わった屈辱を思い起こし、カミュは身を震わせた。
「いや・・だ……っ！」
「カミュ……！」
フロイアの長身が、カミュの身体を床に押し倒した。強い力でカミュの動きを封じたまま、唇が肌を伝って下りて行く。

「嫌だ――――――っ！」
その瞬間、カミュの視界が暗転した。闇の中に、深紅の染みが広がっていく。次に現れたのは、胸から血を流して倒れていくフロイアの姿――――
――な・・に……？これは……――――――
下半身に走った疼きが、カミュの意識を現実に引き戻した。カミュは固く唇を噛んで、なおもフロイアの腕から逃れようとともがいた。息が跳ね上がる。汗が、じっとりと手のひらに滲む。
――ミロ……助けて……ミロ！――――
声に出したのかどうかは判らない。祈るような気持ちで、そう呼んだ時だった。
「カミュ！どうしたんだ！」
ドアを蹴散らす勢いで、ミロが練習室に飛び込んできた。部屋の中の光景を一目見るなり、その場に凍りつく。ミロを待っていたものは、一番あり得ない筈の光景だったのだ。
「フロイア！」
ミロの叫びが、フロイアの全身に突き刺さる。
フロイアは弾かれたように顔を上げた。視界に飛び込んできたのは、
黄金の髪の少年。
「ミ・・ロ……？」
言葉と同時に、激しい頭痛がフロイアを襲った。カミュを押さえていた手を放し、頭を抱え込む。突然苦しみ出したフロイアの様子に、カミュは恐る恐る半身を起こした。
「私は……何を……？」
震える声が、ゆっくりと自問する。
「フロイア……？」
「君を……犯そうとした？……罪にまみれて……地獄へ落とそうと……大切な君を――」
フロイアはくっと笑った。あの男の言っていたことは本当だったのだ。
今までの自分は全て偽り。本当の自分は、カミュを抱きたいと願う汚れた存在でしかなかったのだ。
『いざという時に、貴方を守ってくれる』
冷めた頭に、最後の言葉だけが響く。守るものは、今までの自分……そして、最愛の存在。
「……フロイア！」

カミュが悲鳴に近い叫び声を上げた。息つく間も見せず、隠し持っていた短剣でフロイアが胸を突いたのだ。
「フロイア！　馬鹿なことを……！」
ミロが全速力で駆け寄り、力を失った身体を仰向かせる。心臓を少し外れた辺りに、剣が深々と突き刺さっている。
「……どうやら急所は外れてる。カミュ、管理棟へ急ぐんだ！　まだシュラ先輩がいる筈だから……早く！　走って！」
有無を言わせぬ口調でミロは命じた。自分が行かなかったのは、カミュをここに残したらショックで心中しかねないと思ったからだ。
「解った！」
正気に戻ったカミュが、練習室を飛び出して行く。
責任を負っている時のカミュは強い。きっと、最善の方法をとって戻って来る筈だ。
苦しげな呼吸が、静かな部屋に響く。血の気を失った腕の脈を取りながら、ミロは祈るような気持ちで助けの来るのを待っていた。

救急車は思ったよりも早くやって来た。カミュが機転をきかせて、管理棟へ寄るより先に手配しておいたからだった。
「すぐに手術します。二人程付添でついてきて下さい！」
救急員の言葉に、サガとシュラが従った。ミロとカミュは練習室を片づけて寮で待機。カミュの状態を考えても、一番もっともな対応だった。
手術終了の知らせは、夜十一時を回ったころに電話で伝えられた。結果は成功。医者の話によれば、もう危険は去ったとのことだった。
「カミュ！手術は成功だって！もう心配ないってさ！」
ミロは部屋に飛び込むなり、勢いこんでそう叫んだ。カミュは窓際から月を眺めていたが、その声にゆっくりと振り返ると、唇に微かに微笑みを浮かべて言った。
「そう……それは良かった。」
「カミュ……？」
問い返すミロの声が陰る。
「嬉しくないのか……？」
「嬉しい……？　良かったと思うよ……。命を捨てることは、

決して良いことではないから。」
　そういったカミュの表情はあまりに悲しげで、言葉やわらかに薄情を責めようとしたミロの声を封じた。
「……でも、喜んでいいのかどうか判らない」
「どうして……！」
「だって彼は死にたいと思ったんだろう？」
　再び窓の外を眺めて、カミュが呟く。
「……フロイアは本当に、優れた修道士だったんだ……。彼は、父の教え子の中でも群を抜いていた。頭だけでなく、人格者としても。幼い頃から、私は彼を心から尊敬していた。今でも、私には彼があんな事をしようとしたことが信じられない。」
「カミュ……どうしても許せないのか？」
「許す？」
　カミュはゆっくりとその言葉だけを繰り返した。ミロに聞かせたかに見えて、その言葉は自分自身に向けられているようにも思えた。
「私に許す権利なんてないよ、ミロ。許して下さるのは神だ。何よりも厳しく禁じられている罪を犯してしまった彼を……神はお許しになるだろうか……」
　ミロはやっと、カミュの憔悴の理由を悟った。フロイアはカミュを抱こうとしたことで、神に捧げる筈であった人生を失ってしまったのだ。
「でもね、ミロ」
　ひとつ大きく息をついたカミュが、くすりと笑う。
「君の問いは正しいよ。私は彼を憎んでいる。彼は私が初めて寄せた信頼を裏切ったのだから。それだけじゃない。私が七年間捧げ続けてきた尊敬を、ぶち壊しにしてしまった」
「カミュ……！」
「そして、そのすべての原因はこの私なんだ！」
　いきなり、カミュは振り向いて叫んだ。いつも澄んだ輝きを宿していた瞳に、あふれ落ちる涙を溜めて。
「ミロ……私なんだ……彼の輝かしい人生を目茶苦茶にして、命まで奪おうとしたのは……！　それなのに私は彼を恨んでいる！　私の初めての信頼と尊敬と……そんな何よりも大切にしていたものを踏み躙られて、まるで小さな子供みたいに……全て私のせいなのに！」
「……カミュ！　言うな！」
　ミロは駆け寄ってカミュの身体を抱き締めた。カミュの怒

りが全身から伝わって来る。だがそれは親友フロイアに向けられたものではなかった。
　大切な人を貶めてしまった自分に向けられているのだ。
「・・出会・・わなければ・・良かった……思い出のまま……私が彼の前に現れなければ！」
「違う……！」
　思わず、抱き締める腕に力がこもる。ミロには、カミュの心が痛い程に解った。遠い昔の自分に、覚えがあるからだ。カミュはまだフロイアを信じている。幼馴染みを愛するあまり、彼に罪人の烙印を押すことが出来ないのだ。
　人の心は鋼で出来ている訳ではない。自分の愛する人が罪人になる位なら、自分が罪にまみれた方がどんなにか救われることだろう。
「違うんだ……それでも……彼はきっと君に会えてよかったと思っているよ……」
　まるで子守歌を歌うように、ミロは耳元で囁いた。まるきり出任せを言っているつもりはない。何故なら、彼の立場はそのままミロの立場に等しいのだから。
「君と出会ったその時間が……何物にも代え難い宝物になる。彼は、これからはそれを胸に生きていくんだ。たとえもし君が彼から沢山のものを奪ったとしても……君はそれ以上のものを彼に与えてる」
「それ以上のもの……？」
「そう。」
　腕の中のカミュの緊張が、少しずつ解けていく。
「それは……何？」
「解らない。でも君が彼から受け取ったものと同じだけは、きっと彼も受け取っている筈なんだ。……そうでなければ、あんなふうに抱き締めたいなんて思わないよ……」
　ミロは瞳を閉じた。いつか、カミュと別れる時が来るだろう。日に日に友人の枠を越えつつある自分のカミュへの感情が、どうにもならない域にまで煮詰まってしまった時。以前誓った通りカミュを傷つけないように、自分は彼の元を去るだろう。
　それでも、カミュと過ごした時間を悔いたくはなかった。覚める夢なら見なければ良かったと、悲嘆に暮れることはしたくなかった。
「だから……出会わなければ良かったなんて言うな……頼む

から！」
「ミロ……？」
月の光が、優しい輝きを帯びて二人の上に降り注ぐ。
夜風の滑り込む静かな窓際で、緋と黄金の少年達はまるで一対の彫像のように、いつまでも抱き締め合っていた。

五

一か月が過ぎた。事件で大怪我をしたフロイアは、先日退院してアルテンベルクに戻ってきた。一週間後に神学校へ転校するという。
絶句したカミュに、フロイアは謝りに戻ってきたのだと告げた。まるで嵐の後の海のような、穏やかな静かさだった。
あれ以来、奇妙な呼び出しも待ち伏せも嘘のようになくなった。ミロは相変わらず、アルバイトに精を出している。カミュはいつものように、一足先に練習所に向かっていた。
「お元気そうですね」
ふと通りすがりに声をかけられて、カミュは声の主を振り返った。途端に全身に緊張が走る。淡い金髪と、灰色の瞳――
――

「ああ、そんなに警戒しなくても結構です。私は今日ベルンを去りますから」
「……私に何の用ですか？」
「貴方に聞きたいことがある。赤い髪と瞳の伝説について知っていますか？」
カミュは緊張を解かずにそっと辺りを見渡した。通行人もたくさんいる。ここで危害を加えられることもあるまい。
「……いいえ。私が知りたいくらいです」
灰色の瞳の青年は、まるで挨拶を交わすような気軽さでカミュに近づいてきた。
「赤い髪と瞳には、ある力が宿ると言うのですよ。私は貴方のことをここ一か月ずっと見てきましたが……貴方はどんな危険に遭ってもそんな力など発揮しなかった。ただ一度だけ、テレパシーを使った以外は。」
「テレパシー？」
カミュは訝しげに男を見上げた。テレパシーなど、使った覚えはない。
「自分の危機を仲間に知らせたでしょう？　その証拠に、あのミロ少年が練習所に着く前に貴方の危機を察していた」
「な……見ていたんですか！」
「助ける義理もないでしょう」
カミュはきりっと唇を咬んだ。直感が告げる。間違いない。この男が全ての黒幕だ。
「ほう……そういう表情も出来るんですね。なかなか迫力があって美しい。」
男が、愉しそうに笑った。
「……何が目的なんです？その私の力とやらを見物しに来たとでも？　生憎ですが、私は色が普通でないという意外には他の人と変わるところはありません！」
言い捨てた端から、得体の知れない不安が上がって来る。確かに、あの時ミロは血相を変えて練習室に飛び込んできた。何が起こっていたかも知らずに、だ。
――では・・あの時見た幻覚は未来予知……？――――
瞳の奥に、闇の中に広がった赤い血の映像が蘇る。その数分後に、確かにフロイアは血を流したではないか。
カミュの背筋を、ぞっとするような戦慄が駆け上がった。
「ふふ……どうやら、思い当たる節があるようですね。これで私も安心して帰れる」

「待って下さい！　貴方は一体何者なんです？『白い星』のメンバーではないでしょう！」
　赤い瞳が、灰色の瞳を睨み据える。男は唇だけで笑っていた。
「さあ……。貴方のご想像にお任せしましょう」
　秋風が長い金髪を揺らす。カミュは唇を噛み締めたまま、その自信ありげな後ろ姿を睨み付けていた。

「よお、学校名物ミロ・セガンティーニ、最近元気ないなあ」
　明るい声が降ってきた時、ミロは十三段目の階段を掃いていた。ミロはモップを杖代わりにして凭れ掛かると、少し斜めから声の主を見上げた。
「何だ、アイオリアか。時間ないんだから邪魔するなよ」
「こんな時間にやってるなんて珍しいな。夕方からじゃなかったのか？」
「フレックスタイムなんだよ。今日は午後が詰まってるから、昼休みのうちに少しでも済ましとこうって訳」
「いいなあ、それ」
　癖のある茶色い髪の少年は朗らかに笑った。
　アイオリア・ジュスマイアーはミロのクラスメイトだった。彼も第九学年からの新入り生だったので、ミロ達とは仲がいい。持ち前の快活さと万能の運動神経を生かして、将来は体育の教職免許を取るのだと言っていた。
「手伝うよ」
「え？　いいよ」
「馬鹿、遠慮してんじゃねーよ。誰も分け前よこせなんて言わないって」
　ミロの手からモップを奪い取り、雑巾バケツの方を顎でしゃくる。さっさと手摺を拭けと言うのだ。
「あ・・ありがとう」
　ミロは心温まるものを感じながら雑巾を手に取った。
「ミロ」
　少し真面目なアイオリアの声が呼び止める。
「……何だ？」
「……しぼんでるのは、似合わないぞ。カミュと何かあったのか？」

ミロはずきっと響いた胸の痛みをなだめすかした。今は、落ち込んでる場合じゃない。
「……そんなふうに見えるか？」
「だって最近、よく別々に見かけるから……」
「そうかな？　ここのところ忙しいから……」
嘘ではなかった。事実、ここ数日ミロは雑用で忙しかったのだ。
「そうか。それならいいんだが。お前、ここへ来たばっかりの時は、毎日何かしらの話題を振り撒いていたからな。近頃は派手な喧嘩の噂も聞かないし……元気がないのはそのせいかなと思って」
「馬鹿、喧嘩を人の元気のバロメータにするんじゃない！……違うよ。俺って案外、浮き沈みが激しい性格なんだ」
ミロはその一言でけりをつけて、手すりに手をかけた。次の時間は選択授業。もうしばらくは、カミュと離れて一人でいられる。
でも……
――カミュに……逢いたい……――
理性とは裏腹な感情が訴えるのを聞きながら、ミロは密かに唇を咬んだ。

「どうやら、矢張り『白い星』の仕業ではないらしい」
シュラはいまいましげに書類を放り投げて言った。この部屋は統制部の本部、つまりはシュラの城だ。壮麗な生徒会本部とは違って、かなり機能的な作りになっている。コンピューター類が所狭しと並んでいることも、その印象に拍車をかけているようだった。
「ジークは知らないと言っている。現に、あの現場に彼はいなかった」
「裏から指令を出した可能性は？」
サガが紅茶にブランデーを落としながら訊いた。どちらも、この部屋にはないので生徒会本部から持ち込んでいるのだ。
「ない、とはいい切れない。だが俺は奴を知っている……確かに妙な奴だが、薬を使ってまであんなことをする奴じゃないんだ。フロイアは、淡い腰まで届く金髪と灰色の目をした背の高い男に、幻覚剤を打たれたと言っていた。その男のこと

は、カミュも覚えている。……俺の記憶では、『白い星』にそんな奴はいない」
「成程……」
サガはしばし両手を組んで考え込んだ。髪と瞳の色が違うが、一人思い当たる人物がいる。
「エスカラーデ党のミーノス・カレーシュじゃないか？」
「ミーノス・カレーシュ？」
シュラは鸚鵡返しに聞き返した。
「待てよ、あいつはジュネーヴで反連邦制度・ジュネーヴ独立運動に熱を上げている筈だろう？　それに奴は、ブラウンの髪にダーク・グリーンの瞳だ」
「髪や瞳などどうにでもなる。彼なら、ジュネーヴとベルンの往復など何でもないことだろう。問題は、あれが『白い星』内部の人間の仕業ではないとしたら、何故彼等が『白い星』の皮を被ったのか、だ」
言われて、シュラの頭の中でひとつの回路がつながった。もしミーノスが『白い星』に化けてあんな行為をしたのだとしたら、その目的は見えたにも等しい。
「『白い星』ベルン支部の壊滅か……」
その大義名分を剥奪し、敵の手によって敵側組織を壊滅させる。
「それが一番妥当な線だろうな」
「だが、奴等は今までそんなあからさまな攻撃に出たことはなかった。もしそうだとするなら、何かがあったと考えなければ……」
シュラの自問のような呟きに、サガは答えなかった。そこまでは、サガにも判らない。
しのつく雨が、急に雨音を増した。

ミロは、長い間入口のドアの前で立ちつくしていた。中からは、速いアルペジオをさらうヴァイオリンの音が聞こえて来る。一音も狂わない、完全なテクニックの持ち主だった。
ふと、ヴァイオリンの音が止んだ。きびきびした足取りで戸口に近づく気配がする。ミロは狼狽した。もし出て来て目が合ったら、何と言えばいいのだろうか。
「……いつまでそこでつっ立っているつもりだ？　早く入り

たまえ。」
だが、部屋の中の人は出て来なかった。開いた扉の向こうで、銀の髪を後ろで束ねたサガがじっとミロを見下ろしている。サガは、ミロが様子を窺っていたことに気付いていたのだ。
「はい……」
うなだれたまま、ミロは練習室に足を踏み入れた。
「……何という顔をしている？　シュラの言った通りだな。最近の君は生気がない。どうしたと言うのだ？」
部屋の中央まで無言で後輩を引っ張って来ると、サガは態度を和らげて優しく聞いた。この少年は心の中の声がすぐに姿にあふれ出てしまう。悩んでいる時にはその素直な感情の流出が途絶えてしまうので、サガやシュラ程沢山の人間を見てきた者にはその変化が判るのだ。
「……お願いがあります……サガ先輩。」
ミロは椅子には腰かけず、立ったままで呟いた。
「言ってごらん。」
「今度の秋合宿……俺を第二希望に落として下さい」
「……何故？」
サガが、僅かにその形の良い眉を顰める。
「ここだけの話だが、君とカミュは第一希望で通っているよ。もうそのつもりで準備も進めている。……君達は一緒にストックホルムへ行くと約束したんだろう？」
「はい。……でも……」
ミロは唇を咬んで俯いた。事実を、言葉にして良いものかどうか迷った。
サガはそういったことを言いふらすような人物ではないと思う。だが、いずれ消してしまわなければならない想いなら、誰にも言わずにおいた方が良いのではないか。
「……カミュを見ているのが辛いんだな？」
答は、ミロではなくサガの口から放たれた。ミロは一瞬目を見開き、拳を固く握り締めた。
「逃げても何一つ解決しないぞ？」
「わかってる……でも俺は頭を冷やしたいんです！　一か月間離れてみれば……きっとこんなの嘘だってわかる！　こんな感情は……熱が冷めればきっと……！」
急に胸を突いた衝動に押し流されて、瞳を上げる。既に、抑制はきかなくなっていた。無理は承知だ。これ以上カミュ

の側にいたら、自分はきっと彼を裏切ってしまう。
「お願いです！　これ以上……耐えられない！」
サガは、狂おしい光を宿した青玉色の瞳をまっすぐに受け止めた。こんなに必死なミロを見たのは、初めてだった。
「……冷めなかったらどうする？」
びくっと、ミロの身体が硬直する。
「冷めなかったら……。」
吐息のような声が、悲痛な色を帯びて続ける。
「……ここを、出ます。」
サガは、深い溜め息をついた。不器用な二人は、互いを思いやりながら深く傷つけあってしまう。優しさの刃ほど、深く人の心を傷つけるものはない。
そしてその傷は、決して癒えることはないのだ。
「……解った。今日中に手配しておこう。一か月間で、君なりの結論を出してみなさい……」

雨の上がった林は、洗われた空気の中でくっきりとした姿を浮かび上がらせていた。サガはヴァイオリンを置いて、何気なく窓際へと寄った。遠くに、カミュに出会ったミロが楽しそうに笑っている姿が見える。先程の憔悴した姿からは考えられない程の、明るい姿だった。
――……あの真剣な眼差しを向けられても、カミュは拒み続けるのだろうか……？――――
溢れる切なさをいっぱいに宿していた、青い瞳を思い出す。息をのむ程に美しい表情だった。その全身全霊の想いを、カミュは罪の一言で片づけてしまうのだろうか……。
サガはいつの間にか握り締めてしまっていた拳を開いた。血の気を取り戻した指が、美しい紅に染まる。その赤い色を見つめる瞳に、ゆっくりとある決意が宿っていった。

フル・メンバーの弦楽器団が、第二楽章のアダージョを荘重な響きで奏でていく。ミロはその傍らを通り過ぎようとして、その場に釘付けになった。荘重な、高貴な輝きに満ちた第二主題が弦の総奏によって奏でられ、やがてヴァイオリン

からヴィオラ、チェロへと譲り渡される。

――カミュ……――

いくつもの旋律が絡み合い、舞わせ合って、お互いを高みへと導きながら、切ない程のクライマックスへと流れ込んでいく。ミロにははっきりとカミュのヴィオラを聞き取ることが出来た。深い、霧の中の湖を想わせる甘やかな音。囁くような対旋律が、まるで清らかな胸の内を訴えかけるかのように響く。

――カミュ……!――

叫ぶ想いは、声にはならない。開かれた扉の影で自らの腕を固く抱き、ミロは止まらない涙に瞳を閉じた。